

# 山田遺跡 19 区

2021.9

株式会社ネクステージ  
埼玉県坂戸市教育委員会  
有限会社毛野考古学研究所

# 山田遺跡 19 区

2021.9

株式会社ネクステージ  
埼玉県坂戸市教育委員会  
有限会社毛野考古学研究所

## 序 文

坂戸市は埼玉県のほぼ中央部にあたり、関越自動車道や首都圏中央連絡自動車道など関東地方の交通を支える道路網の結節点に位置しています。地勢をみると市内の大部分は平坦な台地で占められており、越辺川や高麗川沿いに形成された広大な沖積平野には、豊富な水源と豊かな耕作地が広がっています。その結果、約1万5千年前から続く先人たちの生活の痕跡が台地に刻み込まれ、遺跡として今もなお私たちの足元に眠っています。

本報告の山田遺跡が所在する坂戸市八幡地内では、台地内陸部に形成された奈良・平安時代の大規模な集落が確認されています。これまで19回にも及ぶ調査によって、大型掘立柱建物跡や「降り井戸」と呼ばれる大型の井戸跡など、特殊な遺構が検出されています。また、出土品を見ると、奈良三彩陶器や「片牧」墨書き土器など貴重な遺物も数多く発見されており、当時の拠点的集落であった様子が明らかとなってきています。

奈良・平安時代の坂戸台地には、現在の若葉駅周辺に大規模な集落遺跡である若葉台遺跡が存在し、その東側には武藏国と上野国を結ぶ古代官道「東山道武藏路」が縦断するなど、著名な遺跡が広がっております。

これら遺跡群との関連性を探ることで、人々の交流や遺跡の性格を解明し、文献資料ではとらえることのできなかった郷土の歴史像を明らかにすることができます。今回の調査成果が、歴史研究はもとより、各方面で活用され、郷土の歴史を見直す一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、事業者をはじめ御協力を賜りました多くの関係者の方に深く感謝申し上げます。

令和3年9月

坂戸市教育委員会  
教育長 安齊敏雄

## 例 言

- 1 本書は、埼玉県坂戸市に所在する山田遺跡 19 区の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社ネクステージ店舗建設に伴う事前の記録保存を目的として、坂戸市教育委員会が有限会社毛野考古学研究所の支援を受けて実施した。
- 3 所在地、発掘調査および整理期間、調査面積、調査担当、調査支援は以下のとおりである。  
所在地：埼玉県坂戸市八幡二丁目 39 番 1、41 番 1  
調査期間：令和 3 年 3 月 30 日～令和 3 年 5 月 29 日  
整理期間：令和 3 年 6 月 1 日～令和 3 年 9 月 30 日  
調査面積：約 640m<sup>2</sup>  
調査担当：山本良太（坂戸市教育委員会）  
調査支援：宮田忠洋（有限会社毛野考古学研究所）
- 4 発掘調査および報告書作成にかかる費用は、株式会社ネクステージが負担した。
- 5 発掘調査における遺構の写真撮影は宮田が、遺構測量及びドローンによる空中撮影は小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が行った。
- 6 本書の編集は山本と宮田が行った。執筆は I - 1、II、III - 1 - (1) を山本、そのほかを宮田が担当した。遺物実測・観察は車崎正彦（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。遺物の写真撮影、図版作成、報告書刊行作業については宮田が行った。
- 7 発掘調査資料及び出土遺物は坂戸市教育委員会で保管している。
- 8 発掘調査および整理作業参加者は以下のとおりである。

### 【発掘調査】

阿部武則 池田健二 大澤啓身 相馬健二 高山雅信 沼尻正好 松本忠義 村井英子 吉野知美

### 【整理作業】

石川陽子 関野一枝 車崎正彦 國分文 斎藤正美 斎藤雄介 下條真美代 萩原薰 深谷道子  
真下弘美

- 9 発掘調査から報告書の刊行に至る過程で、下記の機関に御協力を賜った。記して感謝申し上げます。  
(順不同・敬称略)

株式会社ネクステージ 山下工業株式会社

## 凡 例

- 1 本書に使用した地図類について、第2図は『新編埼玉県史別編3 自然』中の「第2図 埼玉県の地形区分と名称」をもとに作成した。第3図については国土地理院発行の1/50,000 地形図『川越』・『川島』・『熊谷』、第4図については坂戸市発行の1/2,500『坂戸市基本図』を使用した。
- 2 掲載した遺構平面図・断面図の縮尺は、1/500、1/300、1/60、1/30 を基本としている。いずれの場合も挿図中にスケールを付してある。
- 3 調査区全体の座標は、世界測地系に基づく平面直角座標第IX系を使用した。なお、遺構平面図に記入した方位は、座標北を示す。
- 4 遺構平面図の遺物出土地点番号は、遺物図の番号と一致する。
- 5 遺構計測表の単位は全てmで記載した。
- 6 遺構平面図のトーンについては、下記のとおりである。

地山



焼土・被熱範囲



カマド粘土範囲



- 7 遺物図の縮尺は土器は1/4、土製品は1/2、鉄製品は1/2を基本としている。いずれの図にもスケールを付した。
- 8 遺物図のうち、中心線が一点鎖線の遺物は、反転実測したものを示す。
- 9 遺物図のトーンについては、下記のとおりである。

軸



- 10 遺物観察表における凡例は、下記のとおりである。
  - ・法量の単位は全てcm、重量についてはgで記載した。
  - ・( )内の数値は推定値を、[ ]内の数値は残存値を示す。
  - ・胎土は肉眼で観察できるものを次のように示した。
    - 石英=石 長石=長 海綿状骨針=針 凝灰岩=凝 チャート=チ 赤色砂粒=赤
    - ・焼成は、土師器・土製品が「良好」・「普通」・「不良」の3段階、須恵器は「酸化焰」・「還元焰」に分けた。
    - ・色調は、「新版標準土色帖」2014年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所色標監修）に即した。
- 11 本文における( )内の数値は、残存値を示す。

# 目 次

## 序 文 例 言 凡 例 目 次

I	発掘調査の概要	1	2	豎穴建物跡	9
1	発掘調査に至る経過	1	3	豎穴状遺構	25
2	発掘調査の経過	1	4	掘立柱建物跡	26
3	発掘調査の方法	2	5	土坑	41
4	基本層序	2	6	ピット	42
II	遺跡の立地と環境	3	7	溝状遺構	44
1	地理的環境	3	8	遺構外出土遺物	45
2	歴史的環境	3	IV	総括	46
III	発見された遺構と遺物	6		写真図版	
1	遺跡の概要	6		報告書抄録	

## 挿図目次

第 1 図	基本層序	2	第 25 図	1号豎穴状遺構	25
第 2 図	埼玉県の地形	3	第 26 図	1号豎穴状遺構出土遺物	26
第 3 図	周辺的主要道路	5	第 27 図	6・7号掘立柱建物跡	27
第 4 図	山田遺跡位置図	7	第 28 図	10号掘立柱建物跡（1）	29
第 5 図	山田遺跡 19 区全測図	8	第 29 図	10号掘立柱建物跡（2）	30
第 6 図	A・C 区遺構配置図	8	第 30 図	10号掘立柱建物跡出土遺物	30
第 7 図	4号豎穴建物跡	10	第 31 図	11号掘立柱建物跡	31
第 8 図	4号豎穴建物跡炭化材出土状況	11	第 32 図	12号掘立柱建物跡（1）	33
第 9 図	4号豎穴建物跡掘り方	11	第 33 図	12号掘立柱建物跡（2）	34
第 10 図	4号豎穴建物跡出土遺物	12	第 34 図	13・14号掘立柱建物跡（1）	35
第 11 図	5号豎穴建物跡	14	第 35 図	13・14号掘立柱建物跡（2）	36
第 12 図	5号豎穴建物跡出土遺物	14	第 36 図	13号掘立柱建物跡出土遺物	36
第 13 図	7号豎穴建物跡	15	第 37 図	15号掘立柱建物跡（1）	37
第 14 図	7号豎穴建物跡出土遺物	15	第 38 図	15号掘立柱建物跡（2）	38
第 15 図	13号豎穴建物跡	16	第 39 図	16号掘立柱建物跡	39
第 16 図	13号豎穴建物跡カマド	17	第 40 図	17号掘立柱建物跡（1）	40
第 17 図	13号豎穴建物跡出土遺物（1）	17	第 41 図	17号掘立柱建物跡（2）	41
第 18 図	13号豎穴建物跡出土遺物（2）	18	第 42 図	17号掘立柱建物跡出土遺物	41
第 19 図	14号豎穴建物跡	19	第 43 図	19・20・21・22・23号土坑	42
第 20 図	14号豎穴建物跡カマド	20	第 44 図	8～20号ピット	43
第 21 図	14号豎穴建物跡出土遺物	21	第 45 図	1号溝状遺構	45
第 22 図	15号豎穴建物跡	23	第 46 図	遺構外出土遺物	45
第 23 図	15号豎穴建物跡カマド	24	第 47 図	山田遺跡遺構配置図	47
第 24 図	15号豎穴建物跡出土遺物	24			

# 挿表目次

第 1 表 周辺の主要道路一覧表	5	第 10 表 13 号掘立柱建物跡出土遺物観察表	36
第 2 表 4 号竪穴建物跡出土遺物観察表	12	第 11 表 17 号掘立柱建物跡出土遺物観察表	41
第 3 表 5 号竪穴建物跡出土遺物観察表	14	第 12 表 ピット計測表	44
第 4 表 7 号竪穴建物跡出土遺物観察表	15	第 13 表 道構外出土遺物観察表	45
第 5 表 13 号竪穴建物跡出土遺物観察表	18		
第 6 表 14 号竪穴建物跡出土遺物観察表	21		
第 7 表 15 号竪穴建物跡出土遺物観察表	24		
第 8 表 1 号竪穴状遺構出土遺物観察表	26		
第 9 表 10 号掘立柱建物跡出土遺物観察表	30		

# 写真目次

図版 1	1 調査区遠景	6 22 号土坑	3 14 号竪穴建物跡 第 21 図 9
	2 調査区全景	7 23 号土坑	4 14 号竪穴建物跡 第 21 図 10
図版 2	1 4 号竪穴建物跡	8 1 号溝状遺構	5 14 号竪穴建物跡 第 21 図 10
	2 4 号竪穴建物跡 炭化材検出状況	図版 7 1 4 号竪穴建物跡 第 10 図 1	内面
	3 4 号竪穴建物跡 炭化材出土状況	2 4 号竪穴建物跡 第 10 図 2	6 14 号竪穴建物跡 第 21 図 11
	4 4 号竪穴建物跡 掘り方	3 4 号竪穴建物跡 第 10 図 3	7 14 号竪穴建物跡 第 21 図 12
	5 5 号竪穴建物跡	4 4 号竪穴建物跡 第 10 図 4	8 14 号竪穴建物跡 第 21 図 13
	6 5 号竪穴建物跡 掘り方	5 4 号竪穴建物跡 第 10 図 5	図版 12 1 14 号竪穴建物跡
	7 7 号竪穴建物跡	6 4 号竪穴建物跡 第 10 図 6	第 21 図 14 ~ 16
	8 7 号竪穴建物跡 掘り方	7 4 号竪穴建物跡 第 10 図 7	2 15 号竪穴建物跡 第 24 図 1
図版 3	1 13 号竪穴建物跡	8 4 号竪穴建物跡 第 10 図 8	3 1 号竪穴状遺構 第 26 図 1
	2 13 号竪穴建物跡 掘り方	図版 8 1 4 号竪穴建物跡 第 10 図 9	4 1 号竪穴状遺構 第 26 図 1
	3 13 号竪穴建物跡カマド	2 4 号竪穴建物跡 第 10 図 10	墨書き
	4 13 号竪穴建物跡カマド 遺物出土状況	3 5 号竪穴建物跡 第 12 図 1	5 1 号竪穴状遺構 第 26 図 2
	5 14 号竪穴建物跡	4 5 号竪穴建物跡 第 12 図 2	6 10 号掘立柱建物跡 第 30 図 1
	6 14 号竪穴建物跡 掘り方	5 7 号竪穴建物跡 第 14 図 1	7 10 号掘立柱建物跡 第 30 図 2
	7 14 号竪穴建物跡カマド	6 13 号竪穴建物跡 第 17 図 1	8 10 号掘立柱建物跡 第 30 図 3
	8 14 号竪穴建物跡カマド 遺物出土状況	7 13 号竪穴建物跡 第 17 図 1	図版 13 1 13 号掘立柱建物跡 第 36 図 1
		8 13 号竪穴建物跡 第 17 図 2	2 13 号掘立柱建物跡 第 36 図 1
図版 4	1 15 号竪穴建物跡	図版 9 1 13 号竪穴建物跡 第 17 図 3	墨書き
	2 15 号竪穴建物跡 掘り方	2 13 号竪穴建物跡 第 17 図 4	3 17 号掘立柱建物跡 第 42 図 1
	3 15 号竪穴建物跡カマド	3 13 号竪穴建物跡 第 17 図 5	4 道構外出土遺物 第 46 図 1
	4 15 号竪穴建物跡カマド 掘り方	4 13 号竪穴建物跡 第 18 図 6	5 道構外出土遺物 第 46 図 1
	5 10 ~ 15 号掘立柱建物跡配置状況	5 13 号竪穴建物跡 第 18 図 7	墨書き
図版 5	1 6 号掘立柱建物跡	6 13 号竪穴建物跡 第 18 図 8	6 道構外出土遺物 第 46 図 2
	2 7 号掘立柱建物跡	7 13 号竪穴建物跡 第 18 図 9	7 道構外出土遺物 第 46 図 3
	3 10 ~ 11 号掘立柱建物跡	8 13 号竪穴建物跡 第 18 図 10	8 道構外出土遺物 第 46 図 4
	4 12 号掘立柱建物跡	図版 10 1 13 号竪穴建物跡 第 18 図 11	
	5 13 ~ 14 号掘立柱建物跡	2 13 号竪穴建物跡 第 18 図 12	
	6 15 号掘立柱建物跡	3 14 号竪穴建物跡 第 21 図 1	
	7 16 号掘立柱建物跡	4 14 号竪穴建物跡 第 21 図 2	
	8 17 号掘立柱建物跡	5 14 号竪穴建物跡 第 21 図 3	
図版 6	1 1 号竪穴状遺構	6 14 号竪穴建物跡 第 21 図 4	
	2 1 号竪穴状遺構 遺物出土状況	7 14 号竪穴建物跡 第 21 図 5	
	3 19号土坑	8 14 号竪穴建物跡 第 21 図 6	
	4 20号土坑	図版 11 1 14 号竪穴建物跡 第 21 図 7	
	5 21号土坑	2 14 号竪穴建物跡 第 21 図 8	

# I 発掘調査の概要

## 1 発掘調査に至る経過

坂戸市は勝呂廃寺をはじめとして、市内に多数の埋蔵文化財包蔵地を抱えている。坂戸市教育委員会（以下、市教委）では、埋蔵文化財の保護対策として、開発に際しては必要に応じて試掘確認調査を実施し、その所在や範囲の把握、保存に関する協議に努めている。

山田遺跡19区の発掘調査に至る経緯は以下のとおりである。令和2年12月25日、坂戸市八幡二丁目39番1・41番1について株式会社ネクステージ（以下開発事業者）より店舗建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の開発行為事前協議書が市教委へ提出された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である山田遺跡（No.27-080）および八幡古墳群（No.27-015）に該当していることから、平成25年の開発事業に伴う発掘調査（山田遺跡16区）を実施しており、一部については遺構の現状保存措置を講じている状況にあった。そのため、市教委では地中に現状保存されている埋蔵文化財の取り扱いについて協議が必要な旨を回答するとともに、前回の発掘調査から時間が経過しているため、現状把握を目的とした試掘確認調査の協力を要請した。令和3年1月20日、試掘確認調査を実施し、未調査区域に竪穴建物跡等の遺構が残存している状況を確認できた。調査結果を受け、令和3年1月より市教委と開発事業者間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を実施し、未調査部分のうち、店舗及び地盤改良工事の実施される駐車場の一部について発掘調査による記録保存措置を講ずることとなった。

発掘調査の実施にあたっては、令和3年3月12日に文化財保護法第93条に基づく埋蔵文化財発掘の届出（坂教社発第123号）を埼玉県教育委員会（以下県教委）教育長あてへ進達した。これに対して県教委から同年3月12日に指示通知（教文資第4-1995号）を受けた。文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知（坂教社発第125号）は同年3月12日付けで県

教育長あてへ通知した。

調査体制の組織については、市教委単独では十分な調査体制の構築が困難であると判断し、民間調査組織である有限会社毛野考古学研究所（以下民間調査組織）の発掘調査支援を受けることとなった。令和3年3月15日に開発事業者、民間調査組織、市教委三者合意のもと調査に関する協定を締結した。なお、開発事業者と民間調査組織間の発掘調査にかかる契約は同年3月16日に取り交わされた。以上の経緯を経て発掘調査は令和3年3月30日より開始し、同年5月29日まで行われた。

## 2 発掘調査の経過

発掘調査は令和3年3月30日から開始し、同年5月29日まで実施し、実働41日にわたった。発掘調査の経過については以下のとおりである。

3月30日（火）表土掘削および現場器材の搬入。 4月1日（木）表土掘削終了。遺構確認作業、基準点測量。 4月2日（金）4・5・7・13号竪穴建物跡・19号土坑の調査を開始。 4月6日（火）1号竪穴状遺構の調査を開始。 4月8日（木）14号竪穴建物跡・10号掘立柱建物跡の調査を開始。 4月12日（月）15号竪穴建物跡の調査を開始。 4月13日（火）11号掘立柱建物跡の調査を開始。 4月15日（木）8～10号ピットの調査を開始。 4月16日（金）20号土坑の調査を開始。 4月19日（月）13・14号竪穴建物跡カマド、21・22号土坑の調査を開始。 4月20日（火）12号掘立柱建物跡の調査を開始。 4月22日（木）15号竪穴建物跡カマドの調査を開始。 4月23日（金）13号掘立柱建物跡の調査を開始。 4月27日（火）1号溝状遺構の調査を開始。 4月28日（水）14号掘立柱建物跡の調査を開始。 5月6日（木）15号竪穴建物跡カマド、6・7号掘立柱建物跡の調査を開始。 5月7日（金）11～13号ピットの調査を開始。 5月10日（月）15号掘立

柱建物跡の調査を開始。5月12日(水)空撮準備。14~18号ピットの調査を開始。5月14日(金)空撮。13~15号竪穴建物跡掘り方の調査を開始。5月20日(木)4・5・7号竪穴建物跡掘り方の調査を開始。5月24日(月)16号掘立柱建物跡の調査を開始。基本層序の確認調査を行う。5月25日(火)19・20号ピットの調査を開始。5月26日(水)17号掘立柱建物跡の調査を開始。5月28日(金)重機を用いて調査区の埋め戻しを開始。器材撤収。5月29日(土)調査区の埋め戻しを完了し、調査終了。

### 3 発掘調査の方法

本調査区は3地点に分かれるため、便宜上、調査面積が一番大きい調査区をA区、その南側の調査区をB区、西側の調査区をC区とした(第1図)。遺構番号については、16区と本調査区を跨ぐ遺構がある事から、名称の統一を図るため全ての遺構に対し、16区から連続する番号を付した。

表土掘削は重機を用いて行い、その後人力による遺構確認作業を行った。

検出した遺構は平面プランを確認したのち、ベルトを設定して掘削を行った。土層の観察を行い分層し、土層注記・写真撮影・断面図等の記録を作成した。遺構から出土した遺物は完形個体や一

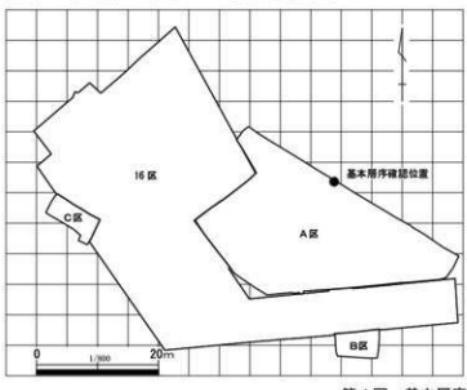
部のみの破損に留まる個体、破碎しているが破片が一箇所に纏まっている個体、大型の破片、土製品、鉄製品、そのほか特異なものはトータルステーションを用いて出土状況を記録しながら、それ以外のものは遺構毎に一括して取り上げた。

その後遺構を完掘し、完掘写真撮影・平面図等の記録を作成した。遺構平面図の作成はトータルステーションを用いた。遺構断面図は基本的に1/20で作図し、カマドについては1/10とした。遺構写真については、35mmフィルムカメラ(モノクロネガフィルム)とデジタル一眼レフカメラ(1000万画素以上)を使用した。調査区の全景写真についてはドローンを用いて撮影した。

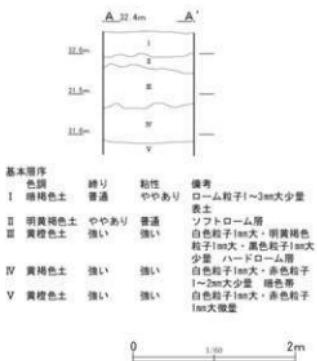
### 4 基本層序

基本層序はA区北壁で記録した。層序はⅠ~Ⅴ層に分層した。Ⅰ層は現表土で暗褐色土である。場所によってはⅠ層の上に碎石の被覆が見られたり、16区に近接する箇所ではⅠ層の代わりに16区埋め戻し土が確認されている。Ⅱ層は明黄褐色土でソフトローム層である。本層上面で遺構を確認した。Ⅲ層以下はハードローム層で綿り、粘性ともに強い。Ⅲ層は黄橙色土である。試掘トレンドでは本層を確認面としている。Ⅳ層は黄褐色土で暗色帶にある。Ⅴ層は黄橙色土である。

なお、各層の観察内容は第1図のとおりである。



第1図 基本層序



## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

坂戸市は埼玉県中央部に位置しており、東側には関東平野、西側には外秩父山地を臨む(第2図)。地形は台地、丘陵、自然堤防、低地に大別され、市域の大部分を入間台地が占める。台地上の標高は約20~50mを測り、西側の丘陵地帯に向かって漸移的に高くなる。なお、市内最高位は外秩父山地の端部にある坂戸市西端部多目地区の城山で、標高は113mを測る。

入間台地は、荒川水系の入間川やその支流である越辺川、高麗川によって形成された扇状地性の台地で、坂戸台地、毛呂台地、飯能台地の3支台で構成される。坂戸台地は、高麗川と小畔川によって画され、概ね起伏なく平坦面が広がる。台地の内陸部には、秩父山地からの伏流水を水源とした湧水点が複数存在しており、これらを源とした飯盛川、大谷川などの小河川が流れることで、台地上には小支谷が形成されている。坂戸市西部から毛呂山町東部にかけて広がる毛呂台地は、越辺川、高麗川と毛呂山丘陵に挟まれた範囲を示し、比較的狭小な台地といえる。台地中央部には越辺

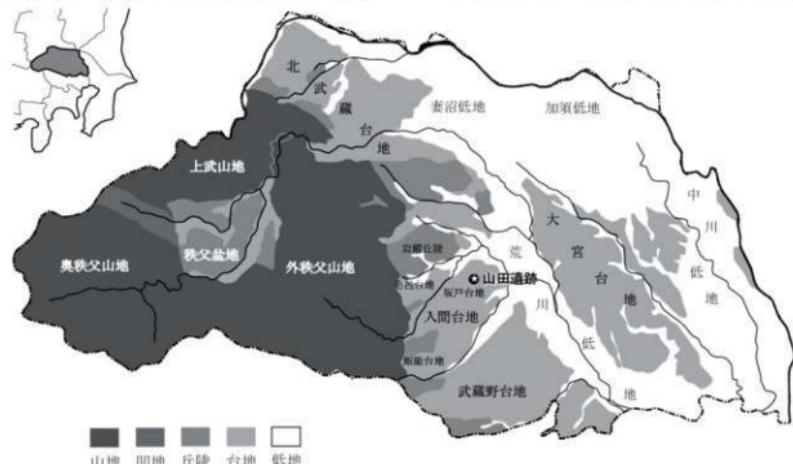
川支流の葛川が縦走しており、その開析によって起伏のある地形となっている。また、各台地の周囲には高麗川、越辺川によって形成された広大な沖積平野が広がっており、今もなお水田地帯として人々の生活を支えている。

市域における遺跡の立地をみると、旧石器時代から古墳時代の遺跡は中小河川沿いに展開し、台地縁辺部に多くの遺跡が成立する。奈良時代以降になると、井戸の掘削技術の向上などもあり、河川から離れた台地内陸部にまで開発が進出している傾向が看取される。今回報告する山田遺跡も、古代に成立する台地内陸部の集落遺跡のひとつで、飯盛川によって開析された小支谷を西側に臨む台地平坦面に立地している。

### 2 歴史的環境

本遺跡の立地する坂戸台地では、旧石器時代から中近世にかけて数多くの遺跡が分布しており、市内の埋蔵文化財包蔵地数は152箇所を数える(令和3年9月現在)。

ここでは、本書で報告する山田遺跡19区の調



第2図 埼玉県の地形

査成果に関連する奈良・平安時代を中心に周辺遺跡の様相を概観する（第3図）。

7世紀後半から7世紀末における周辺の遺跡分布をみると、坂戸台地・毛呂台地の縁辺部に遺跡が集中しており、本遺跡の立地する坂戸台地内陸部には自然発生的な集落は存在しない。具体的には、宮ノ前遺跡（19）や勝呂遺跡（23）、新田前遺跡（25）などが当該期の集落遺跡として挙げられる。7世紀後半以降の大規模古墳の築造状況を見ると、入間郡北部に50m級の大型古墳が比較的多く築造される傾向がみられる。本遺跡の北方至近に位置する新山古墳群では、7世紀代を主体として12基の古墳が確認されており、そのうち2号墳（A）は一辺約50mの大型方墳である。また、周辺の直径約50mを測る大型円墳として成願寺2号墳（石上神社古墳）や浅羽野1号墳（土屋神社古墳）（B）、勝呂1号墳（勝呂神社古墳）（C）が挙げられる。これら大型円墳の詳細な築造時期は判然としないが、いずれも前方後円墳消滅後である7世紀代の有力古墳と推察される。

古墳築造の終焉段階に入ると、市東部では勝呂庵寺（D）の創建と、東山道武蔵路の整備が始まる。勝呂庵寺は、坂戸台地縁辺部に位置し、7世紀第4四半期の創建とされる。東山道武蔵路は勝呂庵寺の東側を南北に縱断していたとみられ、両側に側溝を持つ幅約11mの道路状遺構を町東遺跡（30）と馬場遺跡（24）で検出している。

なお、古代における坂戸市域は大部分が入間郡域と比定され、入間郡（評）家については諸説あるが、近年では川越市の霞ヶ関遺跡周辺が有力とされる。

坂戸台地周辺の集落分布をみると、寺院や官道の開発が展開される7世紀末から8世紀初頭を一大画期として捉えることができ、律令体制下において既存集落の再編と共に、空閑地であった台地内陸部に突如として集落が形成される。

坂戸市と鶴ヶ島市にまたがる若葉台遺跡（6）では、これまでに竪穴建物跡約280軒、掘立柱建物跡約230棟と膨大な数の遺構が発見されており、当該地域の中心的な遺跡と位置付けられる。この遺跡では、四面庇付建物や、2間×6間の長

大な掘立柱建物など特殊な施設が発見されており、他の集落とは異なる特殊性が見て取れる。また掘立柱建物跡の検出件数が多いことも特徴の一つと言える。注目される出土遺物として、奈良三彩小壺や青銅製鉢、円面鏡、「高山」銘墨書須恵器、「時山」銘朱書須恵器などが挙げられ、遺跡の性格については多くの評価がなされている。

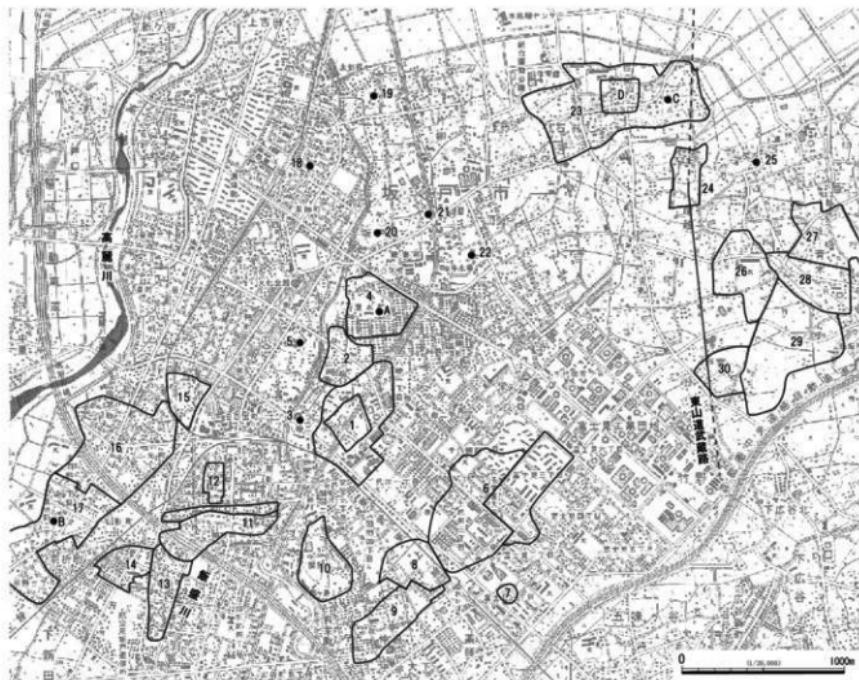
若葉台遺跡の南側には坂戸市池ノ台遺跡（8）と鶴ヶ島市仲道柴山遺跡（9）がある。両遺跡は行政界によって区分されるが、本来は同一の遺跡と考えられ、鶴ヶ岡遺跡（10）も含めて、遺構の分布状況は比較的散漫な状況と言える。

富士見町一丁目遺跡（7）は、9世紀代を中心とする集落が発見されており、「大田大部」と刻書された紡錘車が出土しており特筆される。

若葉台遺跡の北西約800mには、山田遺跡（1）と下山田遺跡（2）がある。下山田遺跡は、小鍛治の工房とみられる竪穴建物などが検出されている。また、特筆される出土遺物として鉄製握り鉄1点が出土している。遺構分布は希薄で、竪穴建物は9世紀以降が主体である。

飯盛川左岸では、一天狗遺跡（11）を中心とする縁町遺跡（12）、上山田遺跡（13）、羽折遺跡（14）などの遺跡が形成される。一天狗遺跡では、水滴や帶金具、漆紙文書などが出土しており、集落内に官人的性格の強い識字層の存在が想定される。また、「又」銘墨書須恵器がこれまでに約100点発見されており、集落の性格を表す特徴的な遺物に位置付けられよう。羽折遺跡では奈良三彩陶器の托や、「神」銘墨書須恵器といった宗教性の強い遺物が出土している。また、縁町遺跡では、脣部に焼成後穿孔のある須恵器大甕がほぼ完形の状態で発見されている。

高麗川低地帯を東側に臨む台地上には坂戸神社遺跡（15）、花影遺跡（16）、宮裏遺跡（17）が存在する。宮裏遺跡と花影遺跡の東側では遺構の密度は希薄で、花影遺跡の北西側から坂戸神社遺跡一帯が集落の中心域と推定される。これらの遺跡の特徴として掘立柱建物跡と竪穴建物数軒を一単位とする小規模な建物群が点在している状況が看取される。坂戸神社遺跡ではほぼ完形の鉄製紡



第3図 周辺の主要遺跡

鍾車をはじめ多数の鉄製品が出土している。

若葉台遺跡の東方約2kmの台地内部には、東山道・武藏路沿いに遺跡群が展開しており、代表的なものとして、住吉中学校遺跡(26)、林際遺跡(27)、宮町遺跡(28)、清進場遺跡(29)などが挙げられる。これらの遺跡からは大型砥石、漆付着須恵器、座金具などの特殊遺物や、石製、鉄製の櫂やコップ形須恵器といった度量衡関連遺物が出土しており工房や市の存在が指摘されている。

靈亀2(716)年には、現在の日高市、飯能市を中心とした地域に高麗郡が建郡され、比企郡の丘陵地帯では南北企窓跡群の窯業生産が活発化する。これらのことと、8世紀前半の遺跡群がどのような関係にあったかは、今後さらなる検討が必要である。

第1表 周辺の主要遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	山田遺跡	18	芦山・宝戸ヶ谷遺跡
2	下山田遺跡	19	宮ノ前遺跡
3	八幡遺跡	20	金内山遺跡
4	清水町遺跡	21	相撲場遺跡
5	仲町遺跡	22	大智寺遺跡
6	若葉台遺跡	23	勝呂遺跡
7	富士見一丁目遺跡	24	馬場遺跡
8	池ノ台遺跡	25	新田前遺跡
9	仲道柴山遺跡	26	住吉中学校遺跡
10	鶴ヶ岡遺跡	27	林際遺跡
11	一天狗遺跡	28	宮町遺跡
12	緑町遺跡	29	清進場遺跡
13	上山田遺跡	30	町東遺跡
14	羽折遺跡	A	新山2号墳
15	坂戸神社遺跡	B	浅羽野1号墳
16	花影遺跡	C	勝呂1号墳
17	宮裏遺跡	D	勝呂麻寺

### III 発見された遺構と遺物

#### 1 遺跡の概要

##### (1) 山田遺跡の概要

山田遺跡は、坂戸台地内陸部に位置し、飯盛川によって開析された小支谷を西側に臨む平坦面に立地している。遺跡の至近には河川や湧水点がなく、井戸の掘削によって水資源を確保していたとみられ、いわゆる降り井戸や、直径が3mを超える大型の井戸も検出されている。これまでの調査成果から、山田遺跡の集落活動態は8世紀に成立し、8世紀前半から半ばをピークに迎え、9世紀後半まで継続するとみられる。本遺跡では、奈良三彩陶器の火舎や灰釉陶器、銅製蛇尾が出土しており、16区では5間×2間の掘立柱建物跡が発見されている点などから、他の周辺集落とは一線を画する拠点的集落であることは確かである。

また、比較的多数の墨書き土器が出土しており、「上」「入」「片牧」などの文字が読み取れる。特に「片牧」銘の墨書きについては、この遺跡付近に馬牧などの馬匹生産・管理に関連した施設の存在を想起させる。

山田遺跡では、これまでに昭和47年の国道407号線の建設に伴う調査を嚆矢に、19地点の調査を実施しており（第4図）、検出された遺構は竪穴建物跡144軒（工房とみられる1軒含む）、掘立柱建物跡32棟、井戸跡21基に及び、いずれも奈良・平安時代に帰属する。その他特筆される出土遺物としては鉄製農具、石製紡錘車、土鍤、石製櫛などが挙げられ、水資源が乏しく農耕に不適格な集落における人々の生活手段として、多種多様な生業が営まれていたことが想定される。

##### (2) 19区の概要

山田遺跡は坂戸台地の内陸部に立地し、この台地西側縁辺部に19区は所在する。調査地はおおむね平坦な地形で、標高は約32mを測る。

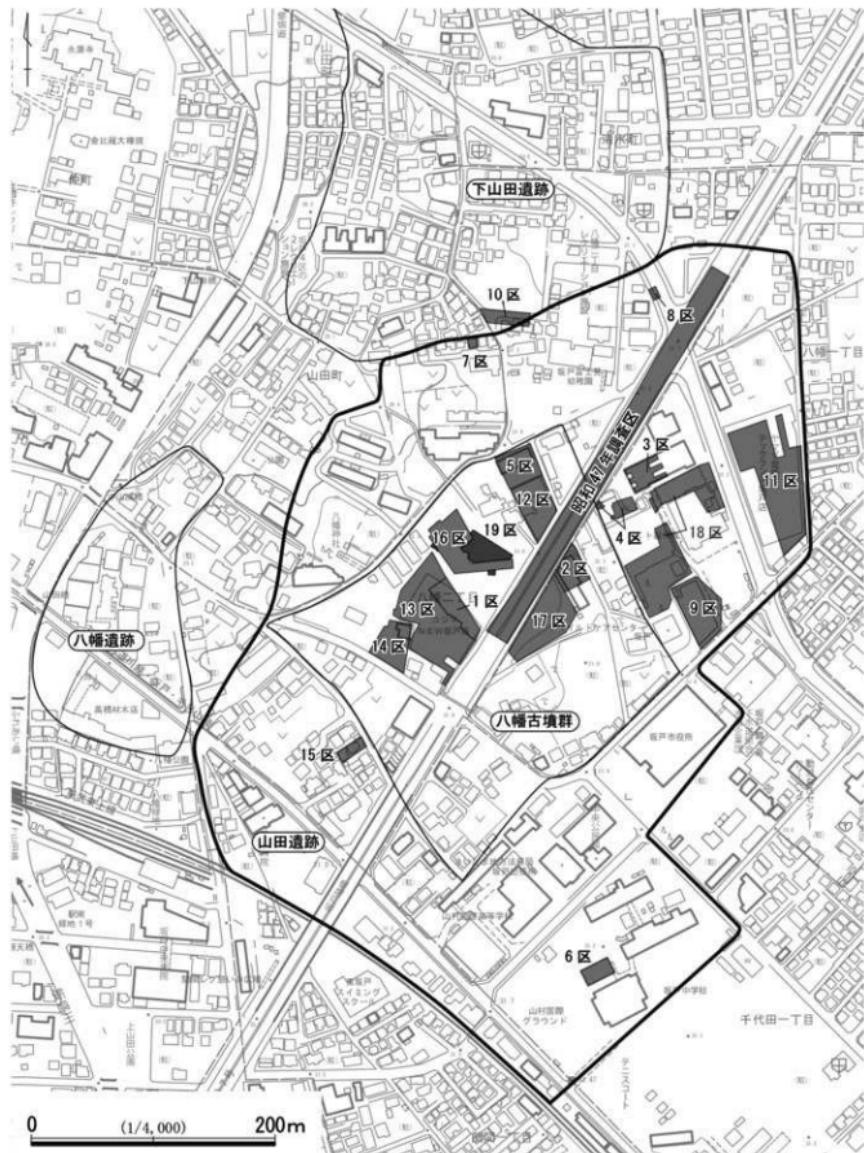
山田遺跡19区の調査原因である店舗建設に伴う開発面積は4,456m<sup>2</sup>であり、そのうち調査対象面積は約640m<sup>2</sup>である。

今回の調査で検出された遺構は、古代の竪穴建物跡6軒、掘立柱建物跡10棟、竪穴状遺構1基、近・現代以前の溝状遺構1条、時期不明の土坑5基、ピット13基である（第5・6図）。

検出された竪穴建物跡は出土遺物や遺構形状から、すべて8世紀後半から9世紀後半に比定される。4・5・7号竪穴建物跡は隣接する16区において大部分の調査が行われている。4号竪穴建物跡は焼失家屋で、焼土に混じって重木と思われる炭化材が出土している。また、壁溝が2条確認されており、拡張が行われていたようである。13・14・15号竪穴建物跡は東壁側にカマドが付設される竪穴建物である。14号竪穴建物跡は10・11号掘立柱建物跡を切っている。検出された竪穴建物跡のなかで出土遺物が最も豊富で、土師器や須恵器のほか墨書き土器や土鍤、鉄製刀子などが出土している。15号竪穴建物跡は12号掘立柱建物跡を切る。埋没土の状況から人為的な埋め戻しが想定される。14号竪穴建物跡とは対照的に出土遺物はごく微量である。

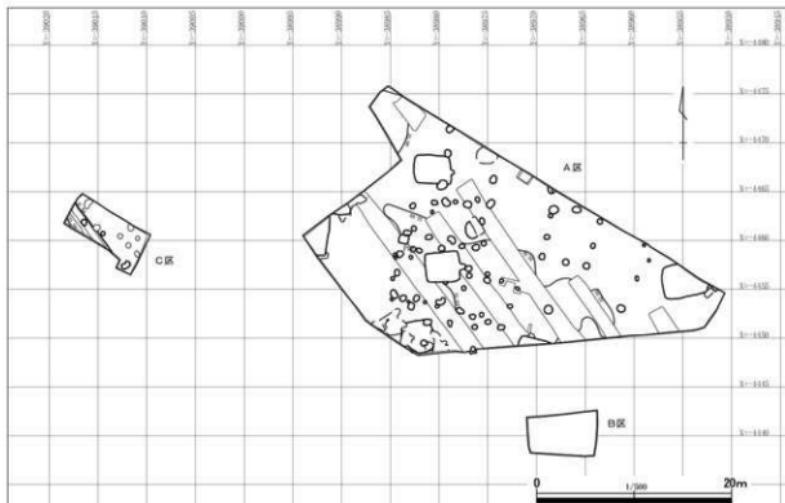
掘立柱建物跡はすべて側柱建物で、3間×2間を主体とする。桁行は東西方向、南北方向の2種類に分けられ、それぞれが互いに重複しながら、南北方向に縦列して検出されている。掘立柱建物跡の柱穴にはL字状をなすものがあり、また柱痕の周囲をローム土混じりの土で埋め、突き固めて補強した様子が窺えるものも見受けられた。

溝状遺構はC区で確認された。調査区を北西から南東方向に縦断しており、6・7号掘立柱建物跡を切っている。遺物は未検出のため時期は判断できないが、近隣住民の話によれば、少なくとも昭和40年までは区画溝として利用されていたようである。

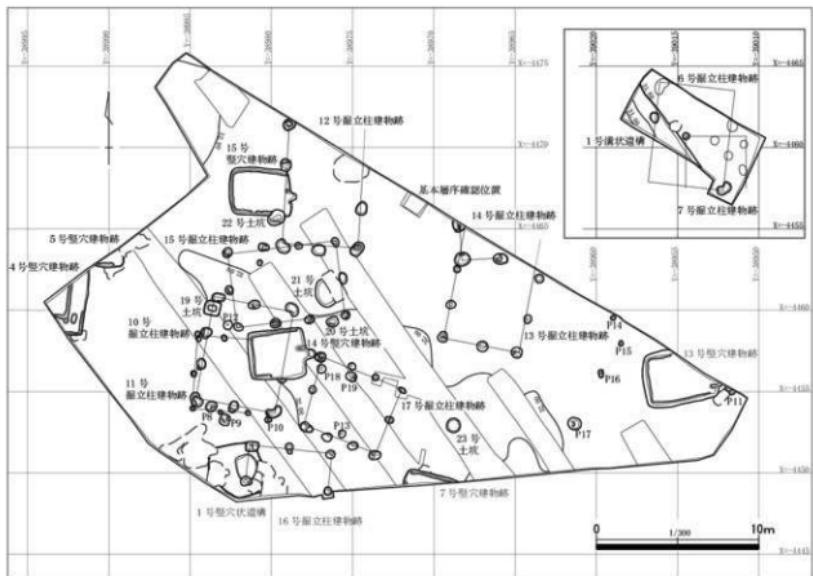


第4図 山田遺跡位置図

III 発見された遺構と遺物



第5図 山田遺跡19区全測図



第6図 A・C区遺構配置図

土坑は方形あるいは不整格円形を呈する。19号土坑は10号掘立柱建物跡、22号土坑は15号竪穴建物跡を切っている。各土坑からは土師器や須恵器の小破片が少量出土しているが、明確な時期は判断しえない。

ピットは13基確認されている。それぞれ配置に規則性はなく、出土遺物も僅かに見られる程度であり、性格・時期はともに不明である。

## 2 竪穴建物跡

### 4号竪穴建物跡（第7～10図 図版2・7・8）

A区南西隅に所在する。全体の1/4を検出し、残る3/4は調査区域外（16区）において調査されている。本調査区での重複はないが、調査区域外（16区）で5号竪穴建物跡と重複しており、本遺構が古いことが確認されている。

平面形状は隅丸長方形を呈する。壁溝が2条確認されていることから、本遺構は拡張建物であったと考えられる。規模は検出範囲での拡張前建物で長軸（1.48）m、短軸（2.25）m、拡張後建物で長軸（2.50）m、短軸（4.10）m、深さは0.44mを測る。主軸はともにN-7°-Eである。

覆土は8層に分層される。レンズ状堆積を呈し、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物を含む褐色土・にぶい黄褐色土からなる。

床面付近からは重木と思われる炭化材が、建物中央から放射状に延びるように検出されている。また、炭化材の上部には焼土が堆積していた。

壁溝は2条検出されている。内側の壁溝は拡張前建物のものと考えられ、検出範囲を巡る。幅は0.15～0.24m、深さ0.16mを測る。外側で見られた壁溝は拡張後建物のもので、北東端と南東隅で確認された。幅は0.15～0.20m、深さ0.09mを測り、断面形状はともに逆台形である。

柱穴は4基（P1～4）検出した。規模はP1長軸0.61m、短軸0.31m、深さ0.14m、P2長軸0.33m、短軸0.30m、深さ0.11m、P3長軸0.20m、短軸0.17m、深さ0.46m、P4長軸0.35m、短軸0.31m、深さ0.25mを測る。

床面は細かい起伏はあるものの、概ね平坦であ

る。顕著な硬化面は認められなかったが、全体的によく縮まる。なお、床面の一部には被熱痕跡が認められている。

掘り方は内側壁溝北端部と建物南東隅で検出され、土坑状に掘り込まれていた。床面からの深さは最大0.13mである。底面には細かい起伏が認められる。掘り方部分はにぶい黄褐色土（9・10層）で埋め戻され、貼床としている。

カマドは調査区域外（16区）に位置している。

遺物の出土量は多く、覆土中～下層に多く見られる。須恵器壺5点（第10図1～5）、須恵器甕1点（第10図6）、土師器甕2点（第10図7・8）、土師器台付甕1点（第10図9）、土鍾1点（第10図10）を掲載した。3は床面上、8はP4、それ以外は覆土上層から下層の出土である。

本建物の時期は、出土遺物の特徴と重複関係から9世紀代に比定される。

### 5号竪穴建物跡（第11・12図 図版2・8）

A区南西隅に所在する。全体の1/6を検出し、残る5/6は調査区域外（16区）において調査されている。本調査区での重複はないが、調査区域外（16区）で4号竪穴建物跡と重複しており、本遺構が新しいことが確認されている。

平面形状は隅丸長方形を呈する。規模は検出範囲で長軸（1.75）m、短軸（1.14）m、深さ0.42mを測る。主軸はN-92°-Eである。

覆土は3層に分層される。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物を含む褐色土で埋没している。

壁溝は東壁で検出されている。幅は0.09～0.18m、深さ0.09mを測り、断面形状は逆台形である。

柱穴は1基（P1）検出した。規模は長軸0.23m、短軸0.12m、深さ0.11mを測る。壁際に位置していたことから、出入口ピットの可能性がある。

床面は概ね平坦であるが、壁際に向かって緩やかに傾斜している。顕著な硬化面は認められなかったが、全体的によく縮まる。

掘り方は全面で検出された。底面には起伏が認められる。床面からの深さは最大0.18mである。

掘り方部分はにぶい黄橙色土（4層）で埋め戻され、貼床をしている。

カマドは調査区域外（16区）に位置している。遺物は少なく、須恵器壺1点（第12図1）・須恵器甕1点（第12図2）を掲載した。1は東壁際から出土している。

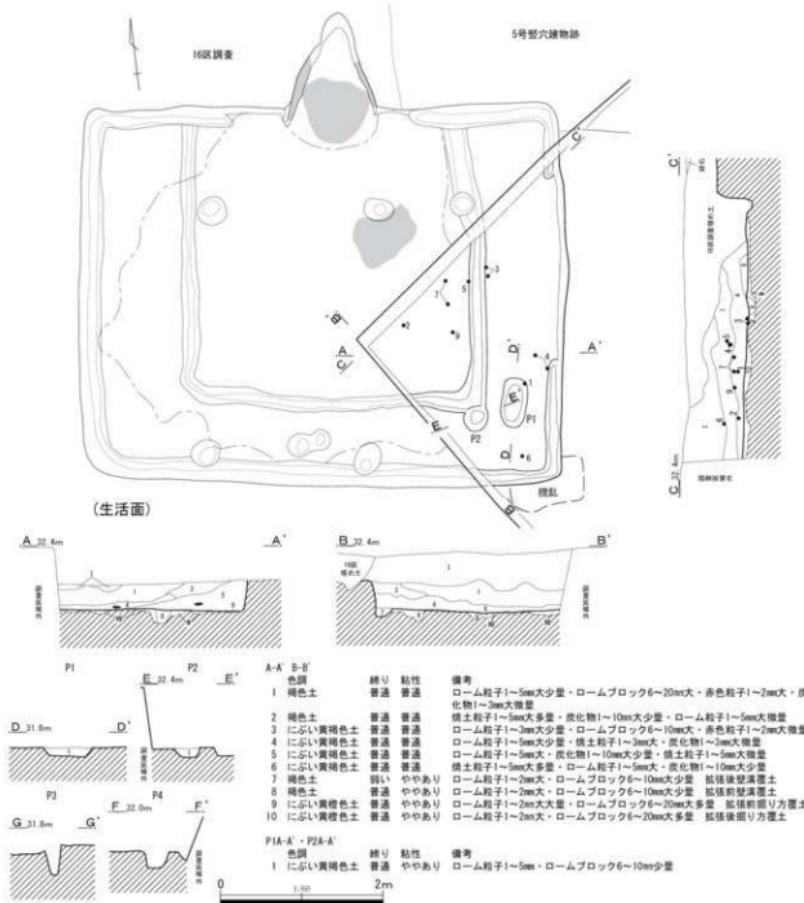
本建物の時期は、出土遺物の特徴と重複関係から9世紀代に比定される。

#### 7号竪穴建物跡（第13・14図 図版2・8）

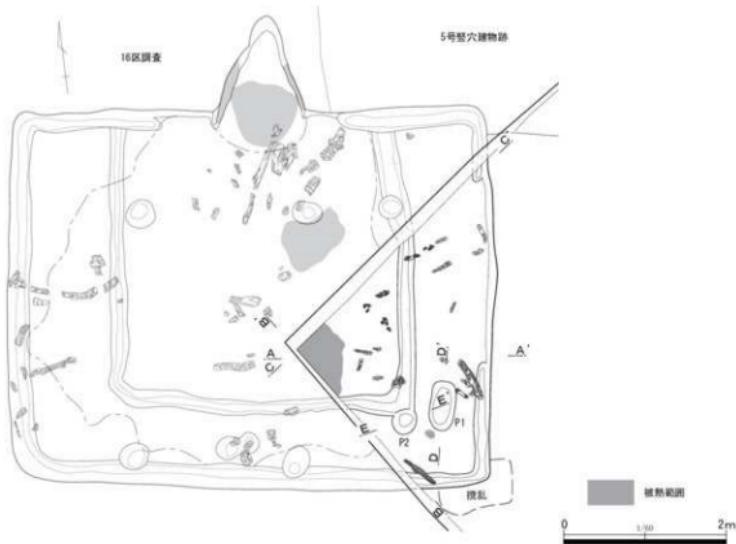
A区中央南壁際に所在する。全体の1/6を検出し、残る5/6は調査区域外（16区）において調査されている。

平面形状は隅丸長方形を呈する。規模は検出範囲で長軸（3.29）m、短軸（1.10）m、深さ0.49mを測る。主軸はN - 99° - Eである。

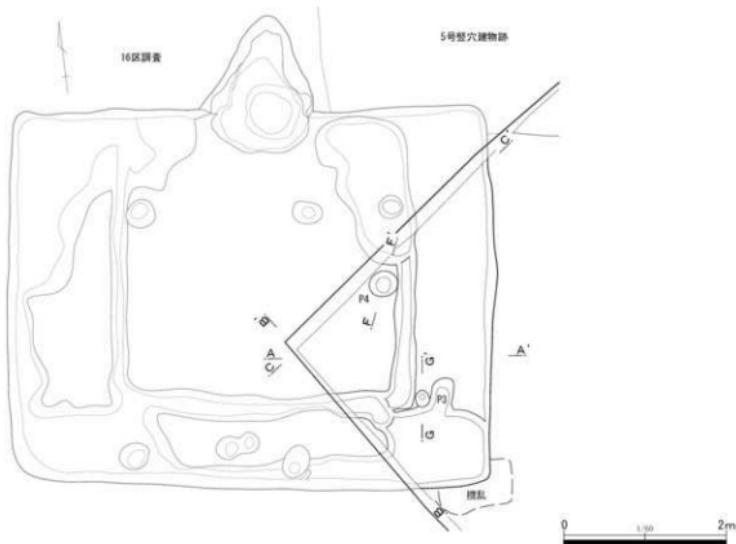
覆土は4層に分層される。レンズ状堆積を呈し、



第7図 4号竪穴建物跡

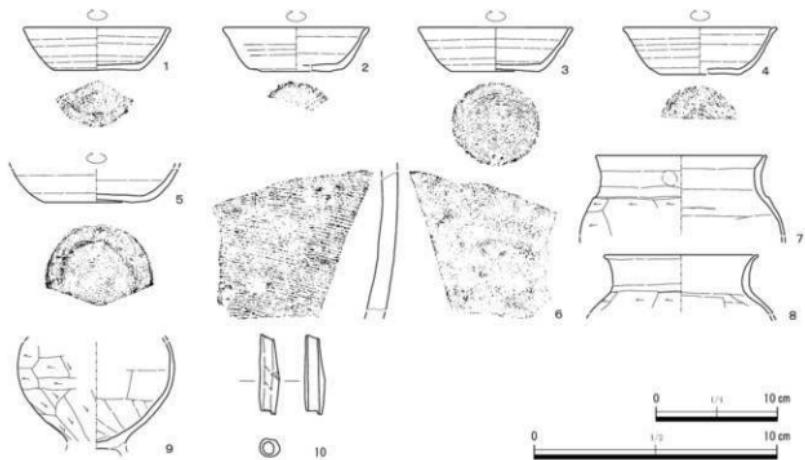


第8図 4号穹穴建物跡炭化材出土状況



第9図 4号穹穴建物跡掘り方

III 発見された遺構と遺物



第10図 4号竪穴建物跡出土遺物

第2表 4号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	須恵器 环	口径:(12.0) 底径:(7.0) 器高:3.5	長・針・ 凝	内面:灰オリーブ 外面:灰オリーブ	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	口縁～ 底部 25%	覆土	南北企産。
2	須恵器 环	口径:(12.0) 底径:(5.8) 器高:3.6	長・針・ 凝	内面:灰オリーブ 外面:灰オリーブ	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	口縁～ 底部片	覆土下層	南北企産。
3	須恵器 环	口径:12.6 底径:7.2 器高:3.6	長・チ・ 凝・針	内面:灰オリーブ 外面:灰オリーブ	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	70%	床面上	南北企産。
4	須恵器 环	口径:(12.6) 底径:(6.4) 器高:3.8	長・凝・ 石・針	内面:灰白 外面:黄灰	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し後、部分的にナデ。	40%	覆土上層	南北企産。
5	須恵器 环	底径:8.5 器高:[3.7]	長・針・ 石	内面:灰 外面:灰	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し後、周縁回転ケズリ。	体～底 部片	覆土上層	南北企産。
6	須恵器 甕	器高:[12.0]	長・チ・ 凝・石	内面:黄灰 外面:暗灰黄	還元 焰	内面:無文で具痕。 外面:平行文タタキ。	胴部片	覆土上層	
7	土師器 甕	口径:(14.0) 器高:[6.5]	長・チ・ 石	内面:にぶい黄褐 外面:にぶい赤褐	良好	内面:口縁部～胴部横方向のナデ。 外面:口縁部横方向のナデ。胴部横 方向のケズリ。	口縁～ 胴部 25%	覆土下層	
8	土師器 甕	口径:(12.6) 器高:[4.8]	長・石・ チ	内面:にぶい黄褐 外面:にぶい黄褐	良好	内面:口縁部～胴部横方向のナデ。 外面:口縁部横方向のナデ。胴部横 方向のケズリ。	口縁～ 胴部 25%	P4 覆土	
9	土師器 台付甕	器高:[8.7]	長・石・ 凝	内面:にぶい赤褐 外面:明赤褐	良好	内面:胴部中位横方向のナデ、下位 斜方向のナデ。 外面:胴部中位横方向のケズリ、下 位斜方向のケズリ。	胴部片	覆土下層	外外面に ス付着。
10	土製品 土鍬	長:[3.3] 幅:0.85 厚さ:0.7 孔径:0.45 重さ:1.646	チ・長・ 石	明黄褐	良好	縦方向のナデ。	ほぼ 完形	覆土下層	

ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物を含む褐色土・黒褐色土からなる。

壁溝は北西隅を除き全周する。幅は0.14～0.16 m、深さ0.08 mを測り、断面形状は逆台形である。

柱穴は確認されていない。

床面は概ね平坦であるが、東側でやや盛り上がる。顕著な硬化面は認められなかった。

掘り方は全面で検出された。壁際に比べ、中央側が一段窪む。床面からの深さは最大0.21 mである。底面には起伏が認められる。にぶい黄橙色土（5層）で埋め戻され、貼床としている。

カマドは調査区域外（16区）において調査が行われている。

遺物は少なく、須恵器壺・甕、土師器甕・台付甕が覆土中から出土している。須恵器壺1点（第14図1）を掲載した。1は覆土上層からの出土である。

本建物の時期は、出土遺物の特徴と遺構形状から古代に比定される。

### 13号竪穴建物跡

（第15～18図 図版3・8～10）

A区東端に所在する。北東側1/4が調査区域外である。

平面形状は隅丸長方形を呈すると想定される。規模は長軸4.50 m、短軸3.51 mで、深さ0.73 mを測る。主軸はN・79°・Eである。

覆土は9層に分層される。レンズ状堆積を呈し、ローム粒子・ロームブロック・赤色粒子を含む褐色土・にぶい黄褐色土・明黄橙色土からなる。

壁溝は南東隅と北側の一部を除き全周する。規模は幅0.12～0.20 m、深さ0.05～0.08 mを測り、断面形状は逆台形である。

柱穴は2基（P1・2）検出した。P1の規模は長軸0.43 m、短軸（0.34）m、深さ0.50 m、P2は長軸0.28 m、短軸0.21 m、深さ0.23 mを測る。

床面は細かい起伏があるが概ね平坦である。貼床部分の縫りがやや弱く、浅く窪む。南壁中央付近に顕著な硬化面が認められた。

掘り方の底面には細かい起伏が認められる。四

隅が土坑状に窪む。ロームブロックを含む黄橙色土（13層）で埋め戻し、貼床としている。

カマドは東壁南寄りに位置する。北側1/2以上が調査区域外に延びる。天井部は確認されていない。袖部はロームブロック・灰白色粘土・小砾を含むにぶい黄橙色土（4～6層）で構築されている。規模は検出長0.50 m、検出幅0.32 m、検出高最大0.18 mである。火床面は床面と同程度の高さで平坦であるが、煙道部へ寄るにしたがって緩やかな傾斜を持つ。7層上面が火床面と想定されるが、明確な被熱痕跡は確認されなかつた。火床面上部の覆土にはカマド構築材とみられる結晶片岩が出土している。煙道部は急角度で立ち上がる。

カマド掘り方は焚口部周辺で確認され、不整形に浅く掘り込まれている。火床面から煙道部には僅かに段差が認められる。袖部下部においても浅い土坑状の掘り込みが検出されている。

遺物は多く、須恵器壺5点（第17図1～5）、須恵器甕3点（第18図6～8）、須恵器櫃1点（第18図9）、土師器甕3点（第18図10～12）を掲載した。1は墨書き土器である。「令」と推察される。7は破片同士が接着している。9は胴部に把手が付く櫃である。遺物は主に覆土中～下層で出土しているが、10～12の土師器甕はカマド及びカマド周囲の床面上からの出土である。

本建物の時期は出土遺物の特徴と遺構形状から8世紀後半に比定される。

### 14号竪穴建物跡

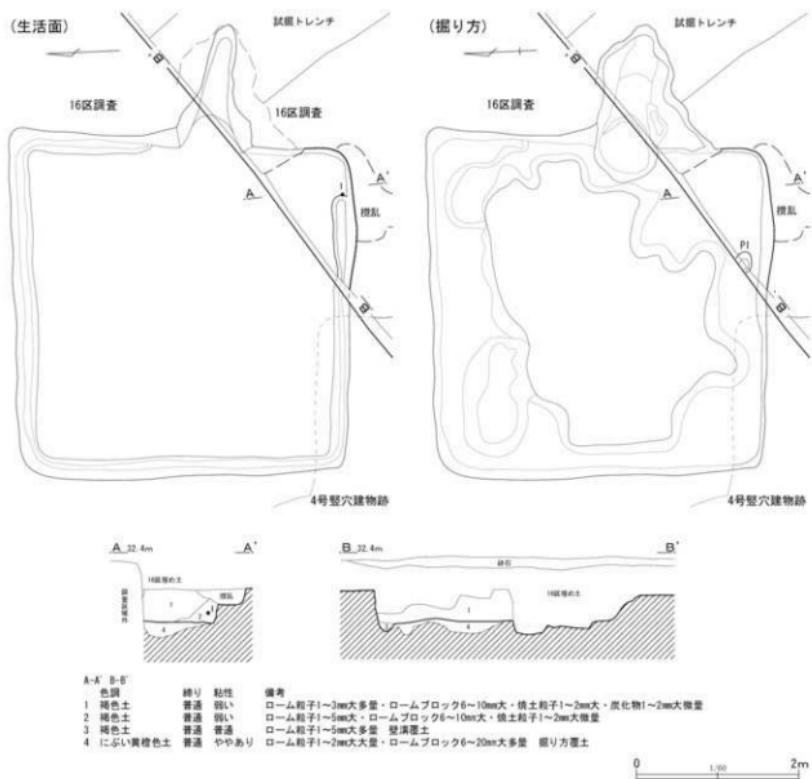
（第19～21図 図版3・10・12）

A区中央西寄りに所在する。10・11・17号掘立柱建物跡と重複しており、南壁が10号掘立柱建物跡P7、煙道掘り方が17号掘立柱建物跡P1を切ることから、本遺構が最も新しい。

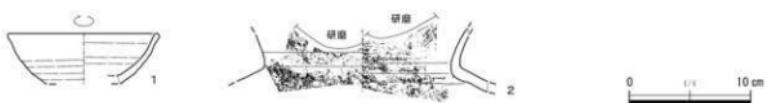
平面形状は隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.53 m、短軸3.12 m、深さ0.56 mを測る。主軸はN・84°・Eである。

覆土は5層に分層される。レンズ状堆積を呈し、ローム粒子・ロームブロック・赤色粒子を含む暗褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土からなる。

### III 発見された遺構と遺物



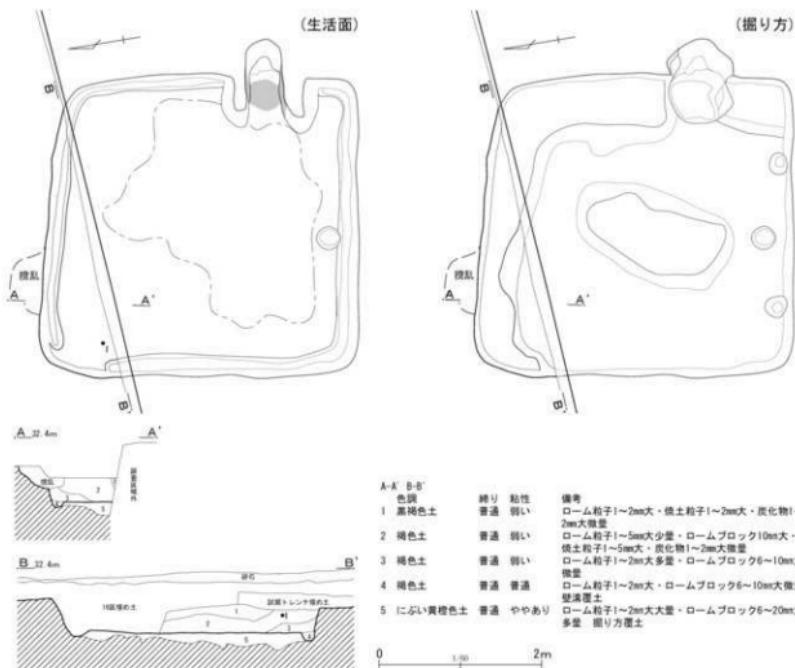
第 11 図 5号竖穴建物跡



第 12 図 5号竖穴建物跡出土遺物

第3表 5号竖穴建物跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	須恵器 环	口径:[12.4] 底径:[6.0] 器高:[4.1]	長・針・ 石	内面:黄灰 外面:黄灰	還元 焰	右回転口クロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。	口縁~ 体部 25%	覆土下層	南北企座。
2	須恵器 甕	器高:[5.1]	長・石・ 針	内面:褐灰 外面:灰	還元 焰	内面:口縁部回転ナデ。胴部横方向 のナデ。 外面:口縁部~胴部回転ナデ。	頭部片	擾乱内	南北企座。 断面に研磨痕。



第13図 7号竪穴建物跡



第14図 7号竪穴建物跡出土遺物

第4表 7号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	須恵器 甕	器高47.0	長・石・赤	内面: 黄灰 外面: 灰	還元 焰	内面: 無文當て具痕。 外面: 平行文タタキ。	肩部片	覆土上層	外面に自然 軸。

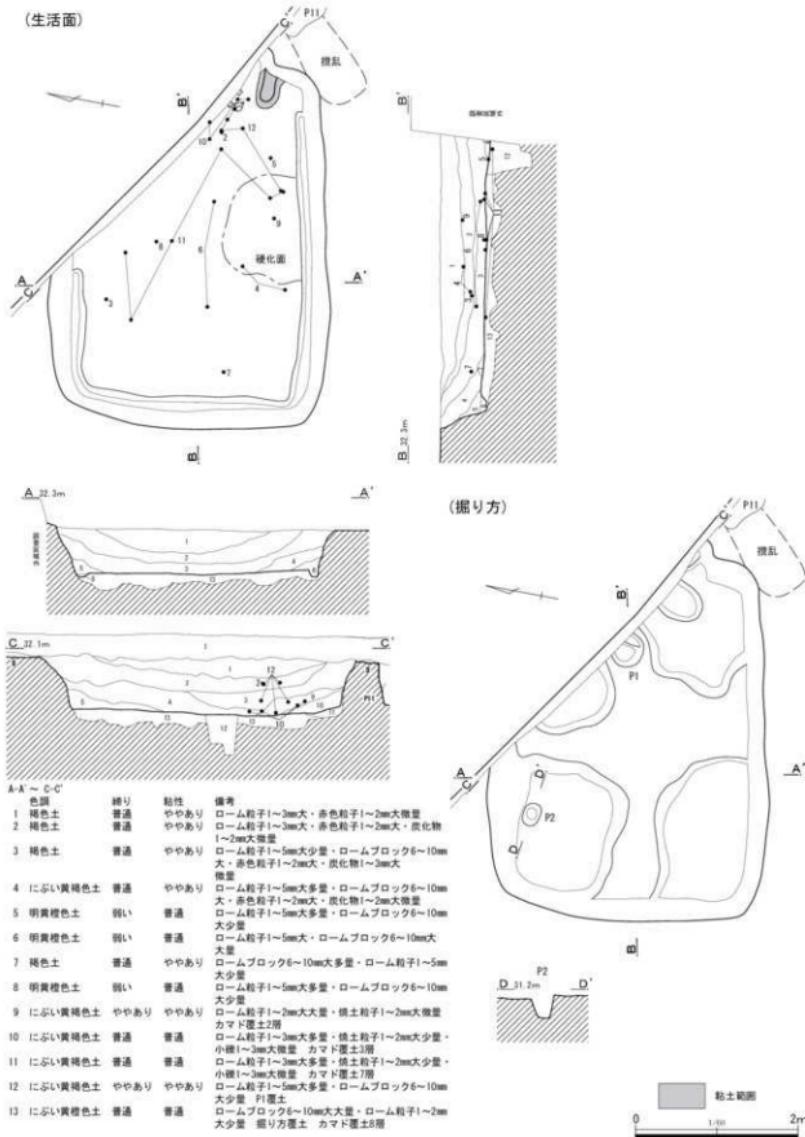
壁溝は東壁際と南東壁際を除き全周する。規模は幅0.12～0.16 m、深さ0.04～0.08 mを測り、断面形状は逆台形である。

床面は細かい起伏があるが、概ね平坦である。北東隅の貼床部分が他の場所に比べると締りがやや弱い。顕著な硬化面は認められていないが、南

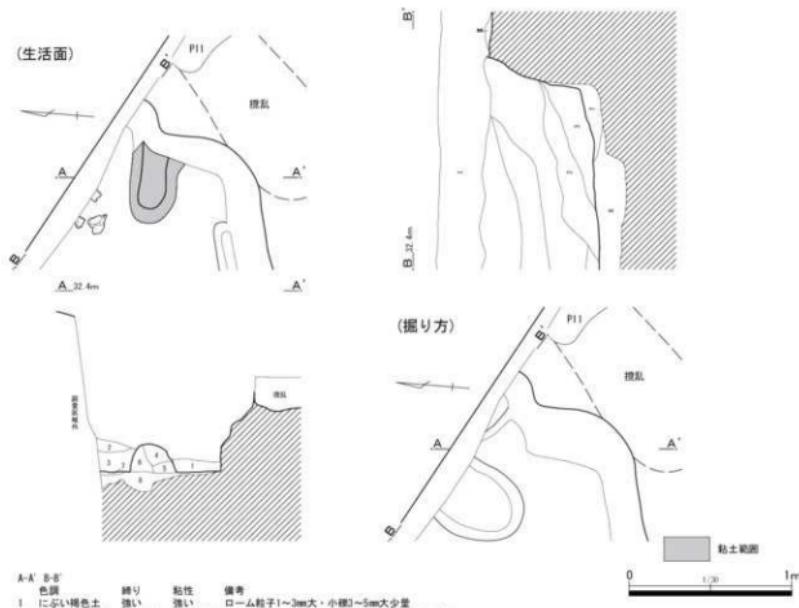
壁際中央部分がやや締まる。

掘り方は北東隅、南東隅、西壁際で認められ、土坑状または帯状に窪む。床面からの深さは最大0.13 mである。底面には起伏が見られる。ロームブロックを含むにぶい黄褐色土・黄橙色土(6・7層)で埋め戻し、貼床としている。

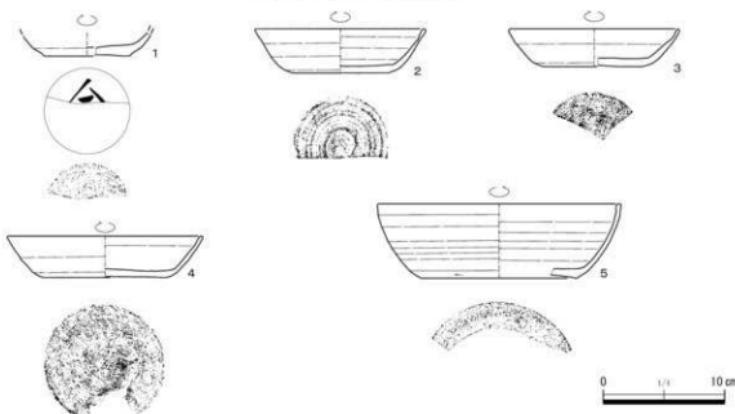
III 発見された遺構と遺物



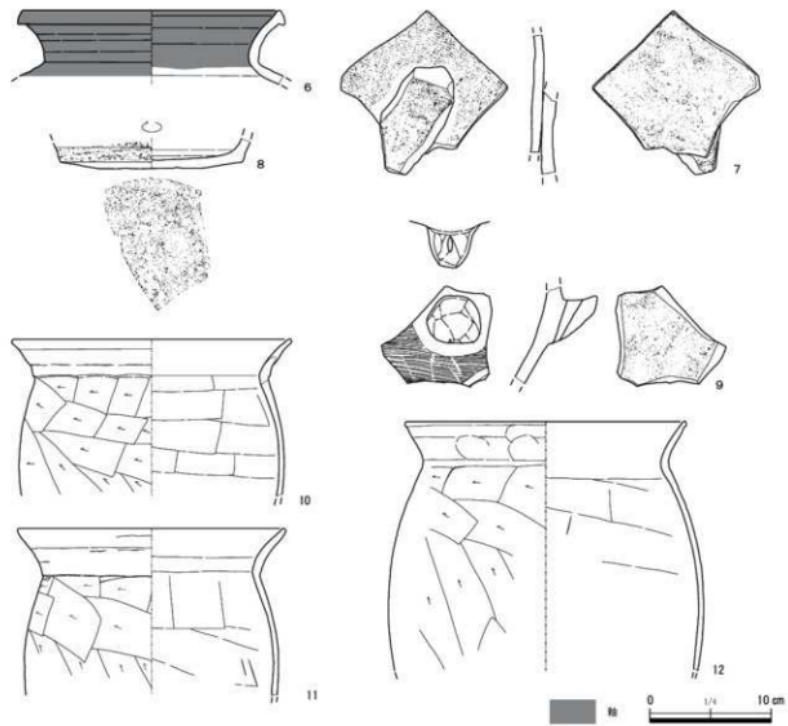
第15図 13号竪穴建物跡



第16図 13号竖穴建物跡カマド



第17図 13号竖穴建物跡出土遺物（1）

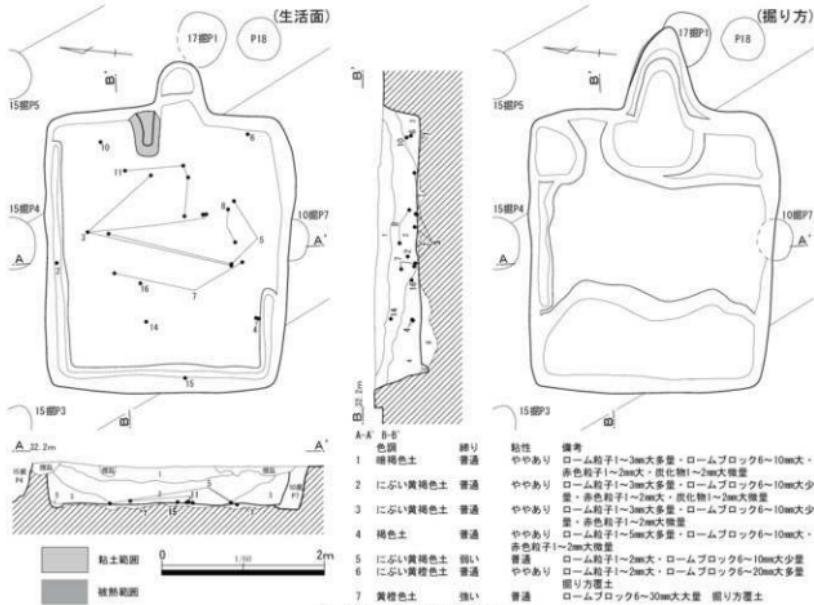


第18図 13号竖穴建物跡出土遺物(2)

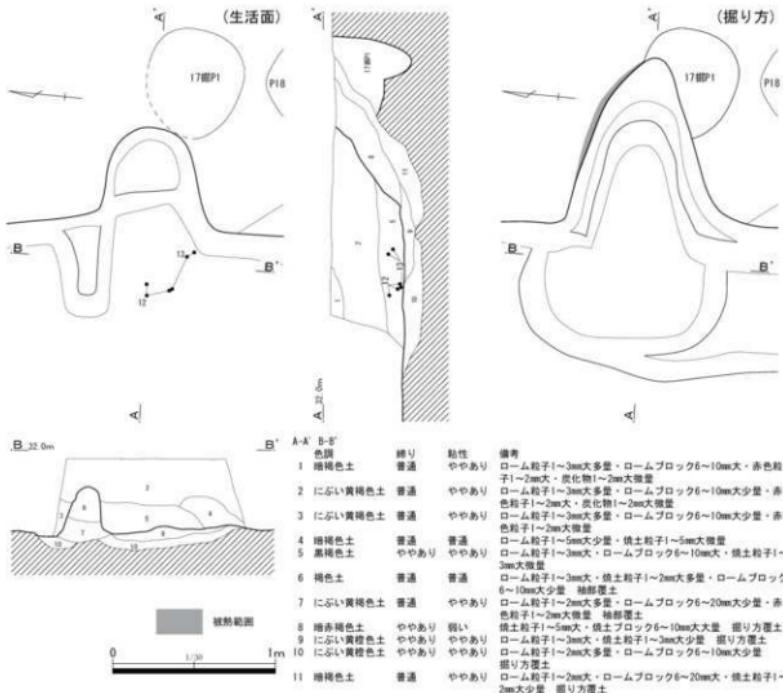
第5表 13号竖穴建物跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	須恵器 环	底径:(7.0) 器高:[1.9]	針・凝・ 長	内面:灰白 外面:灰黄	還元 焰	右回転口クロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	体～底 部片	覆土	南比企産。 底面に墨書き「令」。
2	須恵器 环	口径:(14.0) 底径:7.8 器高:3.6	長・針・ 凝	内面:にぶい黄褐 外面:灰黄	還元 焰	右回転口クロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し後、全面回転ケズリ。	40%	覆土中層	南比企産。
3	須恵器 环	口径:(14.0) 底径:(8.0) 器高:3.1	長・石・ 針	内面:灰 外面:にぶい黄褐	還元 焰	右回転口クロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し後、全面回転ケズリ。	25%	覆土中層	南比企産。
4	須恵器 环	口径:(16.0) 底径:10.0 器高:3.4	長・針・ チ・赤	内面:浅黄 外面:灰黄	還元 焰	右回転口クロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し後、全面回転ケズリ。	60%	覆土 上～中層	南比企産。
5	須恵器 环	口径:(20.0) 底径:(12.8) 器高:6.1	長・針・ チ・石	内面:灰 外面:灰	還元 焰	右回転口クロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ後、体部下端回転ケズリ。底面回転糸切り離し後、全面回転ケズリ。	口縁～ 底部片	覆土下層	南比企産。

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
6	須恵器 甕	口径:(21.0) 器高:[6.0]	長・石 針	内面:黄褐色 外面:黄灰	還元 焰	右回転口クロ形成。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。	口縁部 30%	覆土下層	内外面に自然釉。
7	須恵器 甕	器高:[12.0] 施着片 器高:[8.8]	長・石 凝 施着片 長・石	内面:灰オリーブ 外面:灰 施着片 内面灰白 外面:灰白	還元 焰	内面:無文當て具庭。 外面:平行文タタキ。 施着片 内面:無文當て具庭。 外面:平行文タタキ。	胴部片	覆土中層	外面に自然釉。 施着片は内外面に自然釉。
8	須恵器 甕	底径:(15.0) 器高:[2.5]	長・石	内面:黄灰 外面:黄灰	還元 焰	右回転口クロ形成。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ後、下端回転ケズリ。 底面周縁回転ナデ。	底面片	覆土下層	外面に自然釉。 施着片は内外面に自然釉。
9	須恵器 甕	器高:[8.3]	長・石	内面:灰 外面:灰オリーブ	還元 焰	内面:無文當て具痕後、ナデ。 外面:平行文タタキ後、把手接合、把手上面から下面に穿孔。	胴部片	覆土上層	
10	土師器 甕	口径:(23.0) 器高:[12.9]	長・手・ 石	内面:橙 外面:橙	良好	内面:口縁部横方向のナデ。胴部横方 向のナデ。 外面:口縁部横方向のナデ。胴部上位 横方向のケズリ、中位斜方向のケズリ。	口縁～ 胴部片	覆土下層 カマド覆 土下層	内面にスス 付着。
11	土師器 甕	口径:(22.0) 器高:[13.7]	長・石 凝	内面:橙 外面:にふい橙	良好	内面:口縁部横方向のナデ。胴部横方 向のナデ。 外面:口縁部横方向のナデ。胴部上位 横方向のケズリ、中位斜方向のケズリ。	口縁～ 胴部片	覆土下層 ～床面上	外面にスス 付着。
12	土師器 甕	口径:(23.0) 器高:[20.4]	長・凝 石	内面:明赤褐色 外面:橙	良好	内面:口縁部横方向のナデ。胴部横方 向のナデ。 外面:口縁部横方向のナデ。胴部上位 横方向のケズリ、中位斜方向のケズリ。	口縁～ 胴部片	覆土 中～下層 カマド 覆土下層	外面にスス 付着。



第19 図 14号窯穴室建物跡



第20図 14号竪穴建物跡カマド

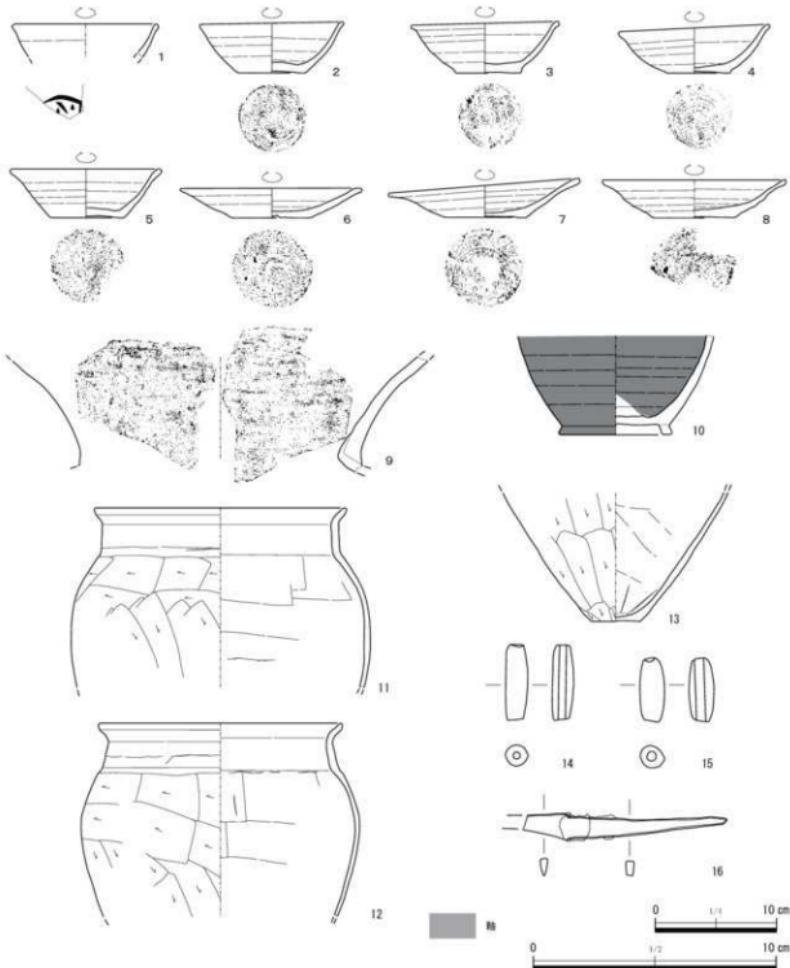
カマドは東壁ほぼ中央に位置する。天井部は確認されていない。袖部は北側のみ残存している。構築する土は覆土と見分けがつきにくかったが、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含む褐色土・にぶい黄褐色土（6・7層）で構築されていた。規模は検出長0.56m、検出幅0.40m、検出高最大0.28mである。火床面は平坦で、床面と同程度の高さである。9層上面が火床面と想定されるが、明確な被熱痕跡は確認されなかった。煙道部は急角度で立ち上がる。

カマド掘り方は焚口部から煙道部まで確認された。焚口部から火床面の掘り方は土坑状に窪む。ロームブロック・焼土粒子を含むにぶい黄褐色土で埋め戻されている。

煙道部の掘り方は煙出し部に向かって幅狭で緩

傾斜のテラスを形成しながら、階段状に立ち上がる。北側壁面には被熱痕跡が認められ、焼土粒子・焼土ブロックを含む暗赤褐色土とロームブロックを含む暗褐色土で埋め戻されている。

遺物は検出された遺構の中で最も多い。須恵器壺5点（第21図1～5）・須恵器皿3点（第21図6～8）・須恵器壺1点（第21図9）・須恵器長頸壺1点（第21図10）・土師器壺3点（第21図11～13）・土錐2点（第21図14・15）・鉄製刀子1点（第21図16）を掲載した。1は墨書き土器である。文字は不明である。覆土中からの出土である。10の長頸壺内面には白色で薄い膜のような付着物が見られる。11～13はカマド及び床面上からの出土である。それ以外はすべて覆土中～下層で検出されている。



第21図 14号整穴建物跡出土遺物

第6表 14号整穴建物跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	須恵器 环	口径:(12.0) 器高:2.7	長・針・ 石	内面:灰黄 外面:灰白	還元 焰	右回転口クロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。	口縁部 片	覆土	南北企産。 外側に墨書き。
2	須恵器 环	口径:11.8 底径:5.5 器高:4.2	長・チ・ 石	内面:灰 外面:灰オリーブ	還元 焰	右回転口クロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	完形	覆土下層	南北企産。

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
3	須恵器 环	口径:12.2 底径:5.4 器高:4.2	長・チ・ 石	内面:灰 外面:灰	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	ほぼ 完形	覆土下層 ~床面上	
4	須恵器 环	口径:12.4 底径:5.3 器高:4.0	長・チ・ 凝・針	内面:灰 外面:灰	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	ほぼ 完形	覆土上層	南北企産。
5	須恵器 环	口径:12.4 底径:6.0 器高:4.0	長・チ・ 針・石	内面:褐灰 外面:灰	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	80%	床面上	南北企産。
6	須恵器 皿	口径:14.9 底径:6.5 器高:2.4	長・石・ 針	内面:橙 外面:橙	醸化 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	完形	覆土下層	南北企産。
7	須恵器 皿	口径:15.8 底径:6.5 器高:3.2	針・長・ 石・赤	内面:灰白 外面:浅黄橙	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	80%	覆土中~ 下層	南北企産。
8	須恵器 皿	口径:(15.0) 底径:6.6 器高:3.1	長・針・ 石	内面:灰オリーブ 外面:灰白	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	40%	覆土中層	南北企産。
9	須恵器 甕	器高:[9.4]	長・チ・ 針・石	内面:灰 外面:灰	還元 焰	内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。	頸部片	覆土	南北企産。
10	須恵器 長頸甕	底径:(9.2) 器高:[9.1]	長・石	内面:灰褐色 外面:にぶい赤褐色	還元 焰	内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し後、高台貼付。	胴~底 部 50%	覆土中層	外面・内面 底部に自然 釉。内面に皮膜 状付着物。
11	土師器 甕	口径:(20.6) 器高:[14.7]	長・チ・ 凝・石	内面:明赤褐色 外面:にぶい赤褐色	良好	内面:口縁部横方向のナデ。胴部横 方向のナデ。 外面:口縁部横方向のナデ。胴部上 位横方向のケズリ、中位斜方向のケ ズリ。	口縁~ 胴部片	覆土下層 ~床面上	
12	土師器 甕	口径:(20.0) 器高:[15.8]	長・石・ チ	内面:明赤褐色 外面:明赤褐色	良好	内面:口縁部横方向のナデ。胴部横 方向のナデ。 外面:口縁部横方向のナデ。胴部上 位横方向のケズリ、中位斜方向のケ ズリ。	口縁~ 胴部片	カマド 覆土下層	
13	土師器 甕	底径:4.0 器高:[10.5]	チ・長・ 石	内面:にぶい赤褐色 外面:赤褐色	良好	内面:胴~底部横・斜方向のナデ。 外面:胴部縱方向のケズリ。底面一 方向のケズリ。	胴~底 部片	カマド 覆土下層	
14	土製品 土鍾	長:3.1 幅:0.9 厚さ:0.85 孔径:0.3 重さ:2.536	チ・石・ 赤	橙	良好	縱方向のナデ。	完形	覆土中層	
15	土製品 土鍾	長:2.6 幅:1.0 厚さ:0.9 孔径:0.4 重さ:2.138	チ・長・ 石・赤	にぶい橙	良好	縱方向のナデ。	完形	床面上	
16	鉄製品 刀子	長:7.4 幅:~1.1(刃) ~0.9(茎) 厚さ:0.3 重さ:5.612					刃先 欠損	覆土下層	

本建物の時期は出土遺物の特徴と遺構形状から9世紀後半に比定される。

#### 15号竪穴建物跡（第22～24図 図版4・12）

A区北西部に所在する。12号掘立柱建物跡と22号土坑と重複し、22号土坑に切られ、12号掘立柱建物跡P2を切る。

平面形状は隅丸長方形を呈する。規模は長軸

3.84 m、短軸 3.01 m、深さ 0.42 m を測る。主軸は N + 92° E である。

覆土は 6 層に分層される。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含む暗褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土からなる。1・3~6 層には粒径の大きいローム粒子・ロームブロックが多量に含まれており、人為的な埋め戻しの可能性がある。

壁溝は東壁際と南壁際の一部を除き全周する。規模は幅 0.13~0.19 m、深さ 0.04~0.08 m を測り、断面形状は逆台形である。

床面は細かい起伏があるが概ね平坦である。全体的に踏み締められており、南壁中央付近には顕著な硬化面が認められる。

掘り方は東側に帶状に、西側では不整形の土坑状に窪む。床面からの深さは最大 0.15 m である。ロームブロックを含むにぶい黄褐色土・黄褐色土(7・8 層)で埋め戻され、貼床としている。

カマドは東壁ほぼ中央に位置する。両袖部は

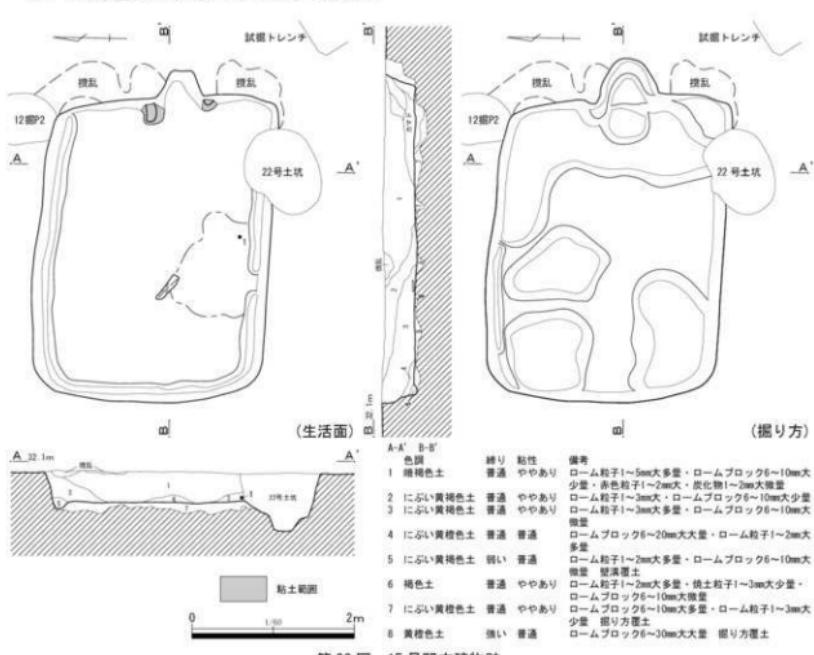
ローム粒子・焼土粒子を含むにぶい黄褐色土(8・9 層)で構築されている。規模は検出長最大 0.25 m、検出幅最大 0.29 m、検出高最大 0.21 m である。火床面は平坦で、床面と同程度の高さである。11 層上面が火床面と想定されるが、明確な被熱痕跡は確認されなかった。煙道部は急角度で立ち上がる。

カマド掘り方は焚口部から煙道部まで確認された。焚口部から火床面にかけて土坑状に窪む。煙道部は 2 段のテラスをもちながら立ち上がる。

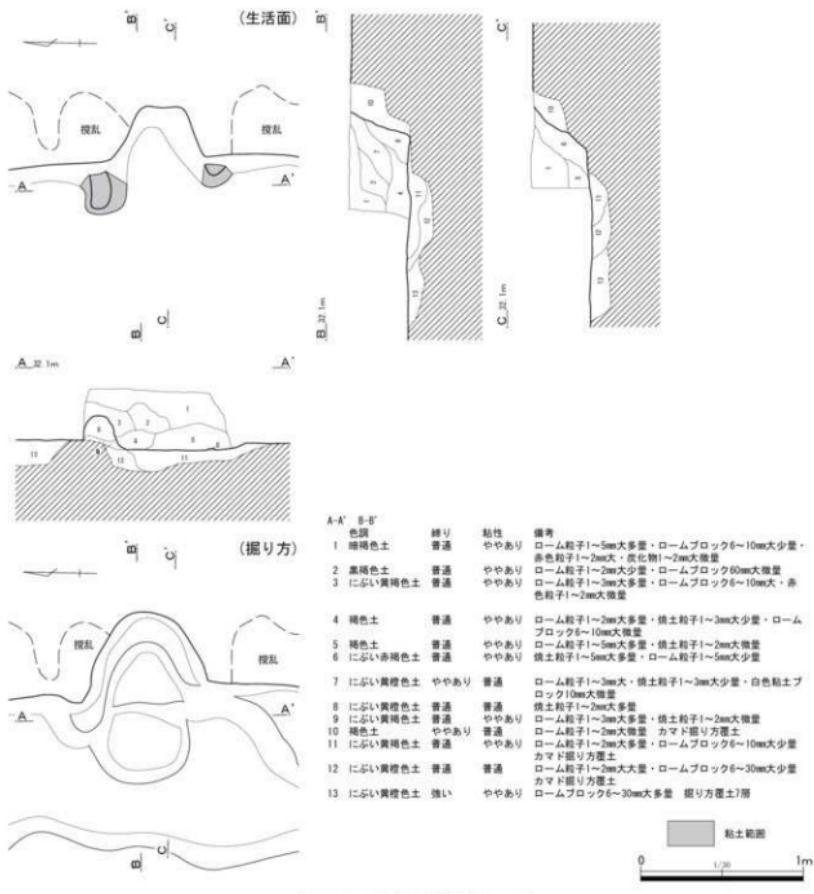
掘り方はローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土・褐色土で埋め戻されている。

遺物は非常に少なく、床面上とカマド内でのみ検出された。土器器表 1 点(第 24 図 1)を掲載する。1 は床面上からの出土である。

本建物の時期は出土遺物の特徴と遺構形状から 8 世紀後半から 9 世紀前半に比定される。



第 22 図 15 号竪穴建物跡



第23図 15号竪穴建物跡カマド



第24図 15号竪穴建物跡出土遺物

第7表 15号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	土器器 甕	口径:(20.0) 器高:[7.5]	長・石	内面:橙 外面:橙	良好	内面:口縁部～脇部横方向のナデ。 外面:脇部横方向のナデ。脇部横 方向のケズリ。	口縁～ 脇部片	覆土上層	外面脇部ス ス付着。

### 3 竪穴状遺構

#### 1号竪穴状遺構 (第 25・26 図 図版 6・12)

A 区南側南壁際に所在する。16号掘立柱建物跡と重複し、P 1・2に切られていることから、本遺構が古い。東壁と西壁の一部は搅乱により削平されている。

平面形状は不整形を呈すると想定される。規模は長軸 (3.34) m、短軸 (3.31) mで、深さ 0.27 mを測る。長軸方向は N -12° - E である。

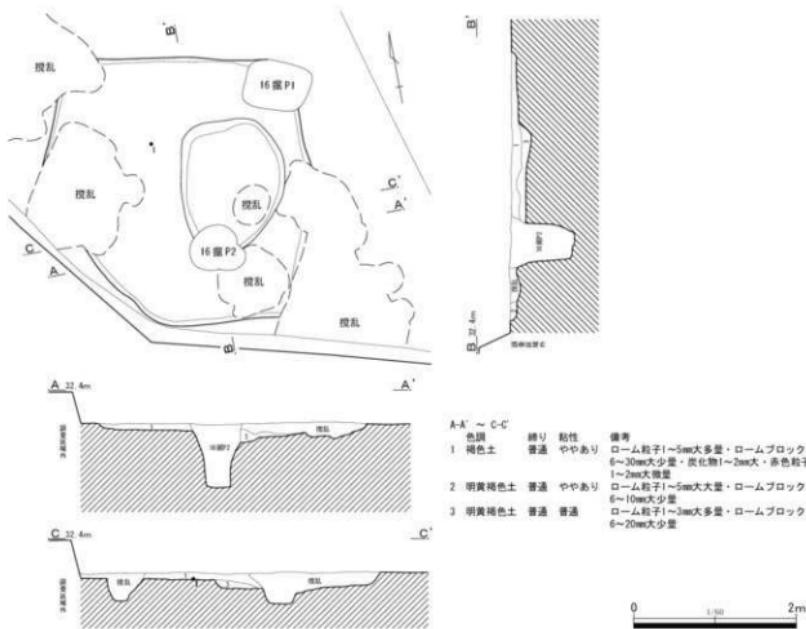
覆土は 3 層に分層される。レンズ状堆積を呈し、ローム粒子・ロームブロック・赤色粒子を含む明黄褐色土・褐色土からなる。

壁溝・貯蔵穴・柱穴などは確認されていない。

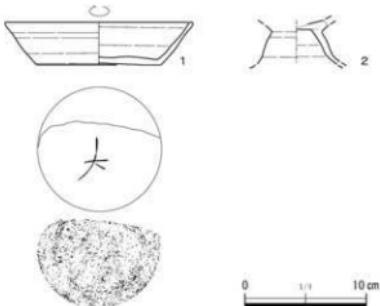
底面には細かい起伏があるが概ね平坦である。貼床や明確な硬化面は確認されていない。底面中央東寄りには不整柵円形の掘り込みが見られた。

遺物は多く、須恵器壺・塊・蓋・甕片、土師器台付甕・甕片、軽石が出土している。主に覆土中から出土しており、周囲の搅乱からも本遺構に伴う可能性がある小破片が散見される。須恵器壺 1 点 (第 26 図 1)、土師器台付甕 1 点 (第 26 図 2) を掲載した。1 は墨書き土器で「大」または「十」を推測される。底面上からの出土である。2 は重複する搅乱内からの出土で、台付甕の台部である。

時期は出土遺物と重複関係から古代と推定されるが、詳細な時期は不明である。



第 25 図 1号竪穴状遺構



第26図 1号竪穴状遺構出土遺物

第8表 1号竪穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	須恵器 环	口径:15.4 底径:10.2 器高:3.5	長・チ・ 針・石	内面:黄灰 外面:黄灰	還元 焼成	右回転ロコ口成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し後、全面回転ケズリ。	50%	床面直上	南北企座。 底面に墨書き「十・大」。
2	土師器 甕	器高:3.6	長・石	内面:にぶい褐色 外面:褐	良好	内面:胸部横方向のナデ。台部横方向のナデ。 外面:横方向のナデ。	胴～台部片	搅乱内	

#### 4 掘立柱建物跡

##### 6号掘立柱建物跡（第27図 図版5）

C区西寄りに位置する。7号掘立柱建物跡・1号溝状遺構と重複し、1号溝状遺構より古い。7号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

本調査では柱穴は2基（P 6・7）検出された。本建物は調査区域外（16区）において調査されたP 1～P 5と合わせて3間×2間の建物を呈する。桁行は3間でP 4・P 7で芯々距離間(6.23)m、梁間は2間でP 3・P 6で芯々距離間(4.68)mを測る。柱間は桁側芯々距離間1.90～2.20m、梁側芯々距離間2.34mを測る。主軸はN-7°-Eである。

柱穴の平面形状は不整橿円形・L字形を呈し、断面形状は逆台形である。柱穴の規模はP 6長軸0.96m、短軸0.61m、深さ0.43m、P 7長軸0.65m、短軸0.51m、深さ0.26mを測る。

覆土はにぶい黄褐色土・にぶい黄橙色土・明黄橙色土からなる。P 7では柱痕が認められ、柱痕周囲にはローム粒子・ロームブロックを含むにぶ

い黄褐色土で突き固めた層が検出された。

遺物は出土していないため明確な時期は不明であるが、周囲の状況から古代と推察される。

##### 7号掘立柱建物跡（第27図 図版5）

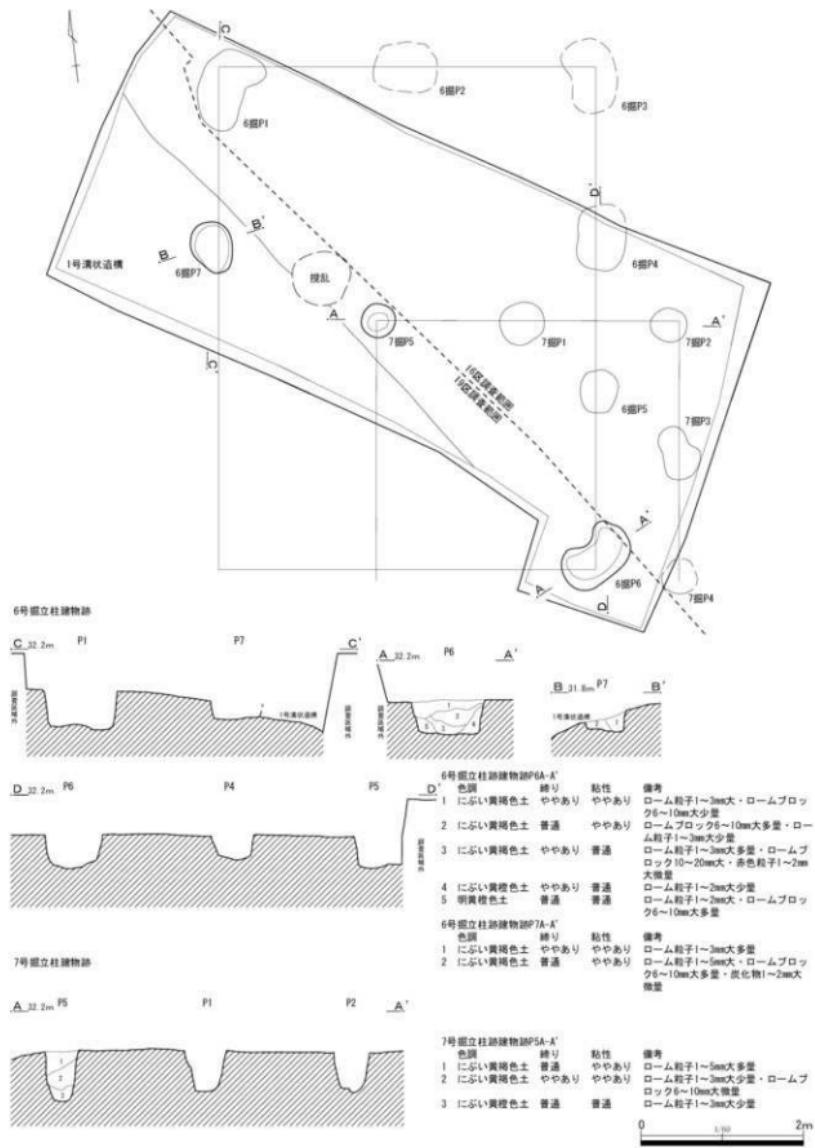
C区南東寄りに位置する。6号掘立柱建物跡・1号溝状遺構と重複し、1号溝状遺構より古い。6号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

本調査では、柱穴は1基（P 5）検出された。本建物は調査区域外（16区）において調査されたP 1～P 4と合わせて東西2間×南北2間以上の建物と想定される。東西軸はP 2・P 5で芯々距離間(3.76)mを測る。柱間はP 1・P 5芯々距離間(1.82)mを測る。主軸はN-7°-Eである。

柱穴の平面形状は不整橿円形を呈し、断面形状は逆台形である。柱穴の規模はP 5長軸0.42m、短軸0.41m、深さ0.60mを測る。

覆土はにぶい黄褐色土からなる。

遺物は出土していないため明確な時期は不明であるが、周囲の状況から古代と推察される。



第27図 6・7号据立柱建物跡

## 10号掘立柱建物跡

(第28~30図 図版5・12)

A区中央南西寄りに位置する。14号竪穴建物跡、11・15号掘立柱建物跡、19号土坑と重複し、14号竪穴建物跡・19号土坑より古く、11号掘立柱建物跡より新しい。15号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

3間×2間の建物と想定され、桁行は3間で芯々距離間(6.39)m、梁間は2間で芯々距離間(4.93)mを測る。柱間は桁側芯々距離間(1.93~2.23)m、梁側芯々距離間(2.24~2.69)mを測る。主軸はN-10°-Eである。

柱穴の平面形状は不整橢円形・L字形を呈し、断面形状はU字形・逆台形である。規模はP1長軸0.82m、短軸0.53m、深さ0.54m、P2長軸0.68m、短軸0.66m、深さ0.53m、P3長軸0.66m、短軸0.51m、深さ0.53m、P4長軸0.91m、短軸0.66m、深さ0.57m、P5長軸0.73m、短軸0.56m、深さ0.45m、P6長軸0.96m、短軸0.62m、深さ0.47m、P7長軸0.51m、短軸0.44m、深さ0.53m、P8長軸0.90m、短軸0.66m、深さ0.62m、P9長軸0.72m、短軸0.52m、深さ0.65mを測る。

覆土はローム粒子・ロームブロック・赤色粒子を含むにぶい黄褐色土・褐色土・暗褐色土からなる。柱痕がP2・4・6・8で認められた。柱痕周囲にはローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土で突き固めた層が検出されている。

遺物はP1~3・5・6・8・9から土器が僅かに出土している。P1出土の須恵器壺(第30図1)、P2出土の須恵器蓋(第30図2)、P3出土の鉄製刀子(第30図3)を掲載した。それぞれ覆土上層からの出土である。

時期は出土遺物及び重複関係から8~9世紀代に比定される。

## 11号掘立柱建物跡(第31図 図版5)

A区中央南西寄りに位置する。14号竪穴建物跡、10号掘立柱建物跡、9号ピットと重複し、14号竪穴建物跡より古い。10号掘立柱建物跡、9号ピットとの新旧関係は不明である。

2間×2間以上の建物と想定され、桁行は2間で芯々距離間(3.46)m、梁間は2間で芯々距離間(4.56)mを測る。柱間は桁側芯々距離間2.19~2.37m、梁側芯々距離間1.63~1.75mを測る。主軸はN-4°-Eである。

柱穴の平面形状は不整橢円形を呈し、断面形状はU字形・逆台形である。規模はP1長軸0.36m、短軸0.31m、深さ0.33m、P2長軸(0.32)m、短軸0.30m、深さ0.47m、P3長軸0.39m、短軸0.34m、深さ0.46m、P4長軸0.34m、短軸0.30m、深さ0.41m、P5長軸0.28m、短軸0.25m、深さ0.37m、P6長軸0.32m、短軸0.31m、深さ0.44m、P7長軸0.39m、短軸0.31m、深さ0.34mを測る。

覆土はローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土を主体に、暗褐色土・褐色土からなる。柱痕は認められなかった。

遺物はP1・6から土器が僅かに出土している。

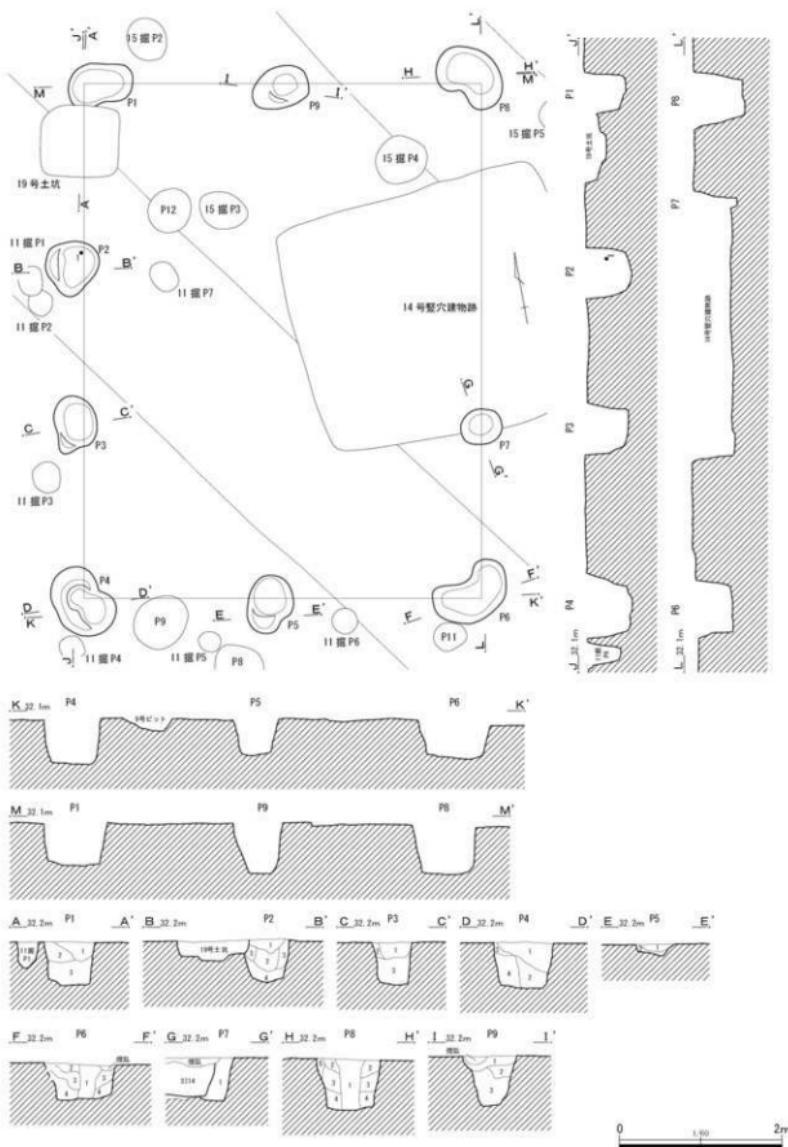
時期は出土遺物と重複関係から古代と推定される。

## 12号掘立柱建物跡(第32・33図 図版5)

A区北側に位置する。北側が調査区域外に延びるものと想定される。15号竪穴建物跡、15号掘立柱建物跡、22号土坑と重複し、15号竪穴建物跡より古い。15号掘立柱建物跡、22号土坑との新旧関係は不明である。

3間×2間以上の建物と想定され、桁行は3間で芯々距離間(7.36)m、梁間は2間で芯々距離間(4.68)mを測る。柱間は桁側芯々距離間(2.43~2.54)m、梁側芯々距離間(2.29~2.37)mを測る。主軸はN-3°-Eである。

柱穴の平面形状は不整橢円形・L字形を呈し、断面形状はU字形・逆台形である。規模はP1長軸(0.75)m、短軸0.64m、深さ0.57m、P2長軸(0.78)m、短軸0.67m、深さ0.52m、P3長軸0.94m、短軸0.72m、深さ0.49m、P4長軸0.82m、短軸0.67m、深さ0.41m、P5長軸0.94m、短軸0.65m、深さ0.54m、P6長軸0.83m、短軸0.67m、深さ0.33mを測る。

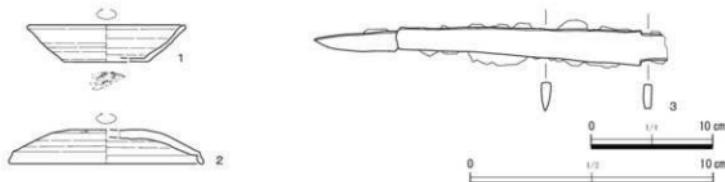


第28図 10号掘立柱建物跡 (1)

III 発見された遺構と遺物

A-A'	色調	織り	粘性	備考	E-E'	色調	織り	粘性	備考				
1 棕褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大少量・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm・赤色粒子1~2mm大微量	1 棕褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大少量・炭化物1~2mm大・赤色粒子1~2mm大微量	1 棕褐色土	普通	ややあり	ロームブロック6~20mm大・ローム粒子1~5mm大少量・炭化物1~2mm大微量		
2 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ロームブロック6~20mm大・ローム粒子1~5mm大少量・炭化物1~2mm大・赤色粒子1~2mm大微量	2 淡褐色土	ややあり	ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量	2 淡褐色土	普通	ややあり	ロームブロック6~20mm大・ローム粒子1~5mm大・炭化物1~2mm大微量		
3 暗褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大少量・ロームブロック6~20mm大・炭化物1~2mm大・赤色粒子1~2mm大微量	3 暗褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量	3 暗褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量		
B-B'	色調	織り	粘性	備考	F-F'	色調	織り	粘性	備考				
1 黒褐色土	普通	普通	ローム粒子1~3mm大・ロームブロック6~10mm大少量・赤色粒子1~2mm大微量	1 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・赤色粒子1~2mm大微量	1 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・炭化物1~2mm大・赤色粒子1~2mm大微量		
2 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量	2 にぶい黄褐色土	強い	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~20mm大少量	2 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~20mm大・炭化物1~2mm大微量		
3 にぶい黄褐色土	弱い	普通	ロームブロック6~10mm大・ローム粒子1~5mm大微量	3 にぶい黄褐色土	強い	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量	3 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量		
4 反灰褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大微量	4 反灰褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大微量	4 反灰褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大微量		
C-C'	色調	織り	粘性	備考	H-H'	色調	織り	粘性	備考				
1 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大少量・炭化物1~5mm大・赤色粒子1~2mm大微量	1 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大・赤色粒子1~2mm大微量	1 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・赤色粒子1~2mm大微量		
2 棕褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大微量	2 にぶい黄褐色土	強い	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大少量	2 にぶい黄褐色土	強い	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~20mm大・炭化物1~2mm大微量		
3 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大少量	3 にぶい黄褐色土	強い	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~20mm大・炭化物1~2mm大微量	3 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~20mm大・炭化物1~2mm大微量		
D-D'	色調	織り	粘性	備考	4 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量	4 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量	
1 棕褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大・赤色粒子1~2mm大微量	5 にぶい黄褐色土	弱い	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量	5 にぶい黄褐色土	弱い	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量		
2 棕褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量	1 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量	1 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量		
3 にぶい黄褐色土	弱い	ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量	2 棕褐色土	弱い	ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量	2 棕褐色土	弱い	ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量		
4 苗褐色土	普通	普通	ロームブロック6~50mm大・ローム粒子1~5mm大	3 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量	3 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大・赤色粒子1~2mm大微量		
I-I'	色調	織り	粘性	備考	1 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量	1 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量	
1 須恵器 環	口径:(13.0) 底径:(6.8) 器高:3.0	長・石・手	内面:褐灰 外面:灰黃褐	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	2 棕褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量	2 棕褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量
2 須恵器 蓋	口径:(16.0) 器高:(2.8)	長・手・針・石	内面:灰 外面:灰	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:口縁部回転ナデ。天井部下半回転ナデ。上半回転ケズリ。	3 棕褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量	3 棕褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量
3 鉄製品 刀子	長:(14.5)、13.4(刃) 幅:(~1.3(刃)、~1.1(茎)) 厚さ:0.4 重さ:7.644				刃先端付近が折れ、すれて錆着。	3 棕褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量	3 棕褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック6~10mm大・炭化物1~2mm大微量

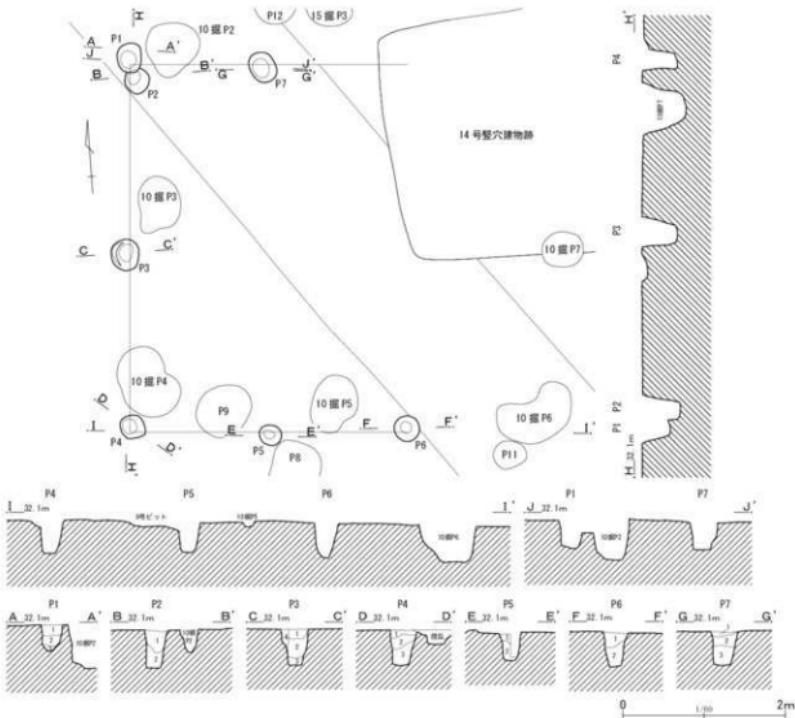
第29図 10号掘立柱建物跡(2)



第30図 10号掘立柱建物跡出土遺物

第9表 10号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	須恵器 環	口径:(13.0) 底径:(6.8) 器高:3.0	長・石・手	内面:褐灰 外面:灰黃褐	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転糸切り離し。	口縁～ 底部片	P1 覆土上層	
2	須恵器 蓋	口径:(16.0) 器高:(2.8)	長・手・針・石	内面:灰 外面:灰	還元 焰	右回転ロクロ成形。 内面:回転ナデ。 外面:口縁部回転ナデ。天井部下半回転ナデ。上半回転ケズリ。	口縁～ 天井部 片	P2 覆土上層	南北企座。
3	鉄製品 刀子	長:(14.5)、13.4(刃) 幅:(~1.3(刃)、~1.1(茎)) 厚さ:0.4 重さ:7.644				刃先端付近が折れ、すれて錆着。	茎部 欠損	P3 覆土上層	



A-A'		色調	織り	粘性	備考	E-E'		色調	織り	粘性	備考
1	緑褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大・炭化物1~2mm大微量		2	にぶい黄褐色土	弱い	ややあり	ローム粒子1~3mm大微量・赤色粒子1~2mm大微量	
2	にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ロームブロック6~20mm大微量・ローム粒子1~2mm大微量		3	暗褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大微量・ロームブロック6~10mm大微量	
3	にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子・ロームブロック6~20mm大微量							
B-B'		色調	織り	粘性	備考	E-E'		色調	織り	粘性	備考
1	にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm大微量・ロームブロック6~10mm大微量		1	にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大微量	
2	緑褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大微量		2	にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大微量	
C-C'		色調	織り	粘性	備考	F-F'		色調	織り	粘性	備考
1	緑褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm大・赤色粒子1~2mm大微量		1	にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大少量・赤色粒子1~2mm大微量	
2	にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大微量・炭化物1~2mm大微量		2	緑褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大微量・ロームブロック6~10mm大微量	
3	緑褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大微量		3	褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大微量	
4	褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大微量							
D-D'		色調	織り	粘性	備考	G-G'		色調	織り	粘性	備考
1	褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大微量・ロームブロック6~10mm大微量		1	緑褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック10mm大微量	
						2	にぶい黄褐色土	弱い	ややあり	ローム粒子1~2mm大微量	
						3	緑褐色土	弱い	ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~10mm大微量	

第31図 11号振立柱建物跡

覆土はローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土を主体として、暗褐色土・にぶい黄橙色土・明黄橙色土からなる。柱痕がP 2・3で認められ、P 3の柱痕周囲にはローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄橙色土で突き固めた層が検出された。

遺物は土師器・須恵器片がP 1・3・5から僅かに出土している。

時期は出土遺物と重複関係から古代と推定される。

### 13号掘立柱建物跡

(第34～36図 図版5・13)

A区中央北東側に位置する。北側が調査区域外に延びるものと想定される。14号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が新しい。

2間×3間以上で、東辺が開く台形状の建物と想定される。桁行は3間で芯々距離間(6.98)m、梁間は2間で芯々距離間4.71mを測る。柱間は桁側芯々距離間2.14～2.65m、梁側芯々距離間2.24～2.47mを測る。主軸は西側桁行でN-3°-Wである。

柱穴の平面形状は不整梢円形・L字形を呈し、断面形状はU字形・逆台形である。柱穴の規模はP 1長軸(0.35)m、短軸(0.26)m、深さ0.65m、P 2長軸0.44m、短軸0.41m、深さ0.69m、P 3長軸0.59m、短軸0.49m、深さ0.67m、P 4長軸0.64m、短軸0.58m、深さ0.72m、P 5長軸0.65m、短軸0.64m、深さ0.56m、P 6長軸0.67m、短軸0.67m、深さ0.80m、P 7長軸0.54m、短軸0.46m、深さ0.43m、P 8長軸0.54m、短軸0.52m、深さ0.62mを測る。

覆土はローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土が主体で、暗褐色土・黒褐色土・にぶい黄橙色土・明黄褐色土・黄橙色土からなる。柱痕がP 2・3で認められたが、柱痕周囲を固めた痕跡は確認されなかった。

遺物は須恵器坏(第30図1)を掲載した。1は墨書き土器で「令」と読める。P 6からの出土である。そのほか、土師器・須恵器片がP 2・4・

5から僅かに出土している。

時期は出土遺物と重複関係から古代と推定される。

### 14号掘立柱建物跡(第34・35図 図版5)

A区中央北東側に位置する。北東側が調査区域外に延びるものと想定される。13号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が古い。

桁行・梁間1間以上の建物と想定される。東西軸は1間で柱間は芯々距離間2.41m、南北軸は1間で柱間は芯々距離間2.16mを測る。南北軸はN-11°-Eである。

柱穴の平面形状は不整梢円形を呈し、断面形状は逆台形である。規模はP 1長軸(0.71)m、短軸(0.52)m、深さ0.60m、P 2長軸0.97m、短軸0.83m、深さ0.58m、P 3長軸0.89m、短軸0.65m、深さ0.70mを測る。

覆土はローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土を主体として、にぶい黄橙色土・褐色土・明黄褐色土・黄橙色土からなる。柱痕がP 3で認められ、柱痕周囲にはローム粒子・ロームブロックを含む明黄褐色土で突き固めた層が検出された。

遺物は土師器・須恵器片がP 2・3から僅かに出土している。

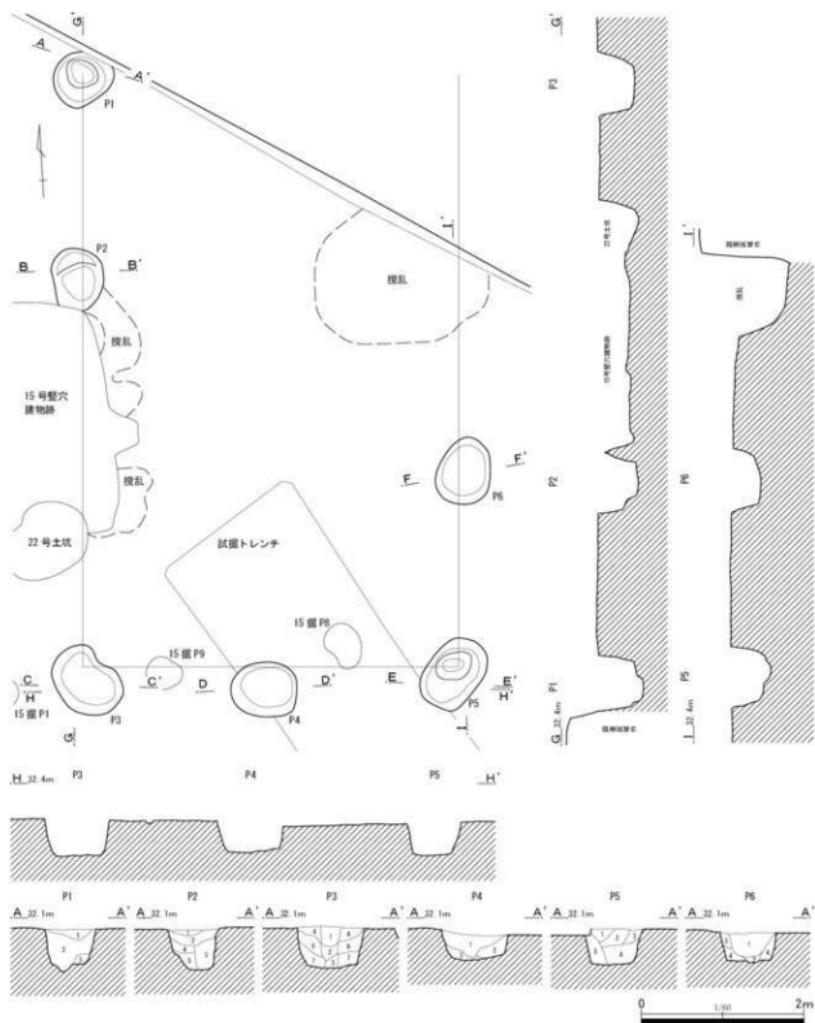
時期は出土遺物と重複関係から古代と推定される。

### 15号掘立柱建物跡(第37・38図 図版5)

A区中央や北西寄りに位置する。10・12号掘立柱建物跡、21号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

3間×2間の建物と想定される。桁行は3間で芯々距離間6.58～6.68m、梁間は2間で芯々距離間4.53～4.69mを測る。柱間は桁側芯々距離2.08～2.29m、梁側芯々距離2.26～2.35mを測る。主軸はN-82°-Eである。

柱穴の平面形状は不整梢円形・L字形を呈し、断面形状はU字形・逆台形である。規模はP 1長軸0.64m、短軸0.53m、深さ0.68m、P 2長軸0.56m、短軸0.49m、深さ0.60m、P 3長



第32図 12号掘立柱建物跡(1)

A-A'	色調 1 暗褐色土	繊り 普通	粘性 ややあり	備考 ローム粒子1~2mm大・赤色粒子1~2mm大 微量	6 黄褐色土	粘性 普通	普通	ロームブロック6~10mm大大量・ローム 粒子1~3mm大少量
2 明黄褐色土	ややあり	ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~ 10mm大大量	7 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~3mm大大量・ロームブロック 6~10mm大少量	
3 明黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~ 10mm大大量	8-B'	色調 1 にぶい黄褐色土	繊り ややあり	粘性 普通	備考 ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~ 10mm大少量
B-B'	色調 1 暗褐色土	繊り ややあり	粘性 ややあり	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~ 10mm大少量	2 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm大大量・赤色粒子1~2 mm大微量
2 暗褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm大少量・炭化物1~2mm 大微量	3 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm大大量	
3 にぶい黄褐色土	弱い	ややあり	ローム粒子1~3mm大・ロームブロック6~ 10mm大少量	E-E'	色調 1 にぶい黄褐色土	繊り ややあり	粘性 普通	備考 ローム粒子1~2mm大・赤色粒子1~2mm 大微量
4 にぶい黄褐色土	強い	普通	ローム粒子1~5mm大・ロームブロック6~ 10mm大少量	2 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm大・ロームブロック6~ 10mm大少量	
5 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大大量・ロームブロック 6~10mm大少量	3 にぶい黄褐色土	ややあり	ややあり	ローム粒子1~3mm大少量	
C-C'	色調 1 にぶい黄褐色土	繊り 普通	粘性 ややあり	ローム粒子1~3mm大少量・赤色粒子1~ 2mm大微量	4 暗褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm大・ロームブロック6~ 10mm大少量
2 にぶい黄褐色土	ややあり	ややあり	ローム粒子1~3mm大大量	5 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~3mm大大量・ロームブロック 6~10mm大微量	
3 にぶい黄褐色土	弱い	ややあり	ローム粒子1~5mm大大量	F-F'	色調 1 暗褐色土	繊り ややあり	粘性 普通	備考 ローム粒子1~3mm大大量・ロームブロック 6~20mm大・赤色粒子1~2mm大微量
4 にぶい黄褐色土	強い	普通	ローム粒子1~2mm大・ロームブロック6~ 10mm大・赤色粒子1~2mm大微量	2 にぶい黄褐色土	弱い	普通	ローム粒子1~3mm大・ロームブロック6~ 30mm大微量	
5 にぶい黄褐色土	強い	普通	ローム粒子1~5mm大大量・ロームブロック 6~20mm大少量	3 にぶい黄褐色土	ややあり	普通	ローム粒子1~3mm大少量	
				4 にぶい黄褐色土	ややあり	普通	ローム粒子1~3mm大・ロームブロック6~10mm 大微量	

第33図 12号掘立柱建物跡（2）

軸 0.62 m、短軸 0.46 m、深さ 0.67 m、P 4 長軸 0.61 m、短軸 0.59 m、深さ 0.67 m、P 5 長軸 0.61 m、短軸 0.48 m、深さ 0.63 m、P 6 長軸 0.53 m、短軸 0.49 m、深さ 0.58 m、P 7 長軸 0.71 m、短軸 0.48 m、深さ 0.44 m、P 8 長軸 0.57 m、短軸 0.44 m、深さ 0.46 m、P 9 長軸 0.44 m、短軸 0.41 m、深さ 0.69 m、P 10 長軸 0.66 m、短軸 0.50 m、深さ 0.82 m を測る。

覆土はローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土を主体として、にぶい黄褐色土・褐色土・黒褐色土・暗褐色土からなる。

柱痕は P 2・3 で認められたが、柱痕周囲を固めた痕跡は確認されなかった。

遺物は P 1 ~ 6・9・10 から土師器・須恵器片が僅かに出土している。

時期は出土遺物と重複関係から古代と推定される。

#### 16号掘立柱建物跡（第39図 図版5）

A区中央南壁際に位置する。南側は調査区域外（16区）に延びると想定されるが、16区では攪乱による削平を受けていたため、詳細は不明である。1号竪穴状遺構と重複し、本遺構が新しい。

2間×1間以上の建物と想定される。東西軸は2間で芯々距離間 4.84 m、南北軸は1間で芯々

距離間 2.27 m を測る。柱間は東西側 2.28 ~ 2.57 m、南北側 2.11 ~ 2.27 m を測る。南北軸は N - 6° - E である。

柱穴の平面形状は不整楕円形を呈し、断面形状はU字形・逆台形である。規模は P 1 長軸 0.81 m、短軸 0.60 m、深さ 0.57 m、P 2 長軸 0.67 m、短軸 0.62 m、深さ 0.76 m、P 3 長軸 0.48 m、短軸 0.44 m、深さ 0.66 m、P 4 長軸 0.54 m、短軸 0.52 m、深さ 0.66 m、P 5 長軸 0.66 m、短軸 0.45 m、深さ 0.59 m を測る。

覆土はローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土を主体として、にぶい黄褐色土・暗褐色土からなる。柱痕が P 3・4 で認められ、P 4 の柱痕周囲にはローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土で突き固めた層が検出された。

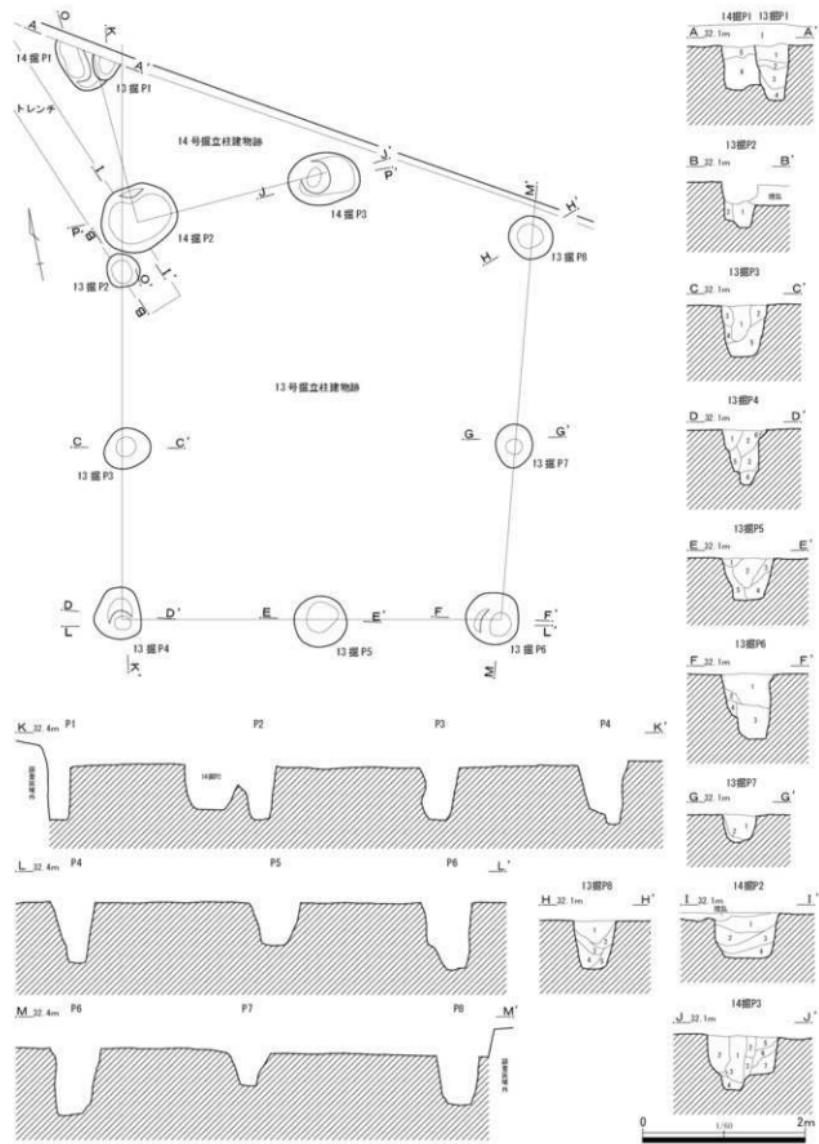
遺物は土師器・須恵器片が P 3 から僅かに出土している。

時期は出土遺物と重複関係から古代と推定される。

#### 17号掘立柱建物跡

（第40～42図 図版5・13）

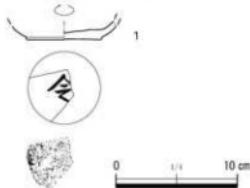
A区中央南寄りに位置する。14号竪穴建物跡、P 13・18・19 と重複し、14号竪穴建物跡より古い。P 13・18・19 との新旧関係は不明である。



第34図 13・14号掘立柱建物跡（1）

		P1	P2	O'	P3	P'
A-A'	色調	縋り	粘性	備考		
1 暗褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大量・ロームブロック6~10mm少量			
2 黄褐色土	ややあり	普通	ローム粒子1~5mm・ロームブロック6~10mm大量			
3 黒褐色土	ややあり	ややあり	ローム粒子1~5mm大量・ロームブロック6~10mm少量			
4 にぶい黄褐色土	弱い	ややあり	ローム粒子1~5mm・ロームブロック6~20mm大量			
5 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm・ロームブロック6~10mm大量			
6 明黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大量・ロームブロック6~10mm少量			
B-B'	色調	縋り	粘性	備考		
1 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm大量			
2 暗褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大量			
C-C'	色調	縋り	粘性	備考		
1 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm少量・赤色粒子1~2mm大量			
2 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm大量			
3 にぶい黄褐色土	ややあり	ややあり	ローム粒子1~3mm・ロームブロック6~10mm大量			
4 にぶい黄褐色土	ややあり	ややあり	ローム粒子1~3mm大量			
5 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm少量			
D-D'	色調	縋り	粘性	備考		
1 黑褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大量			
2 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子・ロームブロック6~10mm大量			
3 黑褐色土	ややあり	ややあり	ローム粒子1~3mm大量・ロームブロック6~10mm少量			
4 黑褐色土	ややあり	普通	ローム粒子1~5mm・ロームブロック6~10mm少量			
5 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大量・ロームブロック6~10mm少量			
6 明黄褐色土	普通	普通				
E-E'	色調	縋り	粘性	備考		
1 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm大量			
2 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm少量・ロームブロック6~10mm少量			
3 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm・ロームブロック6~10mm少量			
4 にぶい黄褐色土	ややあり	ややあり	ローム粒子1~3mm大量・ロームブロック6~10mm少量			
5 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~3mm・ロームブロック6~20mm少量			
F-F'	色調	縋り	粘性	備考		
1 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大量・ロームブロック6~10mm少量			
2 にぶい黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm・ロームブロック6~10mm大量			
3 暗褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大量			
4 暗褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大量			
5 明黄褐色土	普通	普通	ローム粒子1~5mm大量			
G-G'	色調	縋り	粘性	備考		
1 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm少量・赤色粒子1~2mm微量			
2 にぶい黄褐色土	普通	普通	ロームブロック6~10mm大量・ローム粒子1~5mm微量			
3 にぶい黄褐色土	ややあり	ややあり	ローム粒子1~3mm・ロームブロック6~10mm少量			
4 にぶい黄褐色土	弱い	ややあり	ローム粒子1~5mm少量			
5 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm少量			
J-J'	色調	縋り	粘性	備考		
1 にぶい黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~2mm少量・ロームブロック6~10mm少量			
2 明黄褐色土	普通	ややあり	ローム粒子1~5mm大量・ロームブロック6~10mm少量			

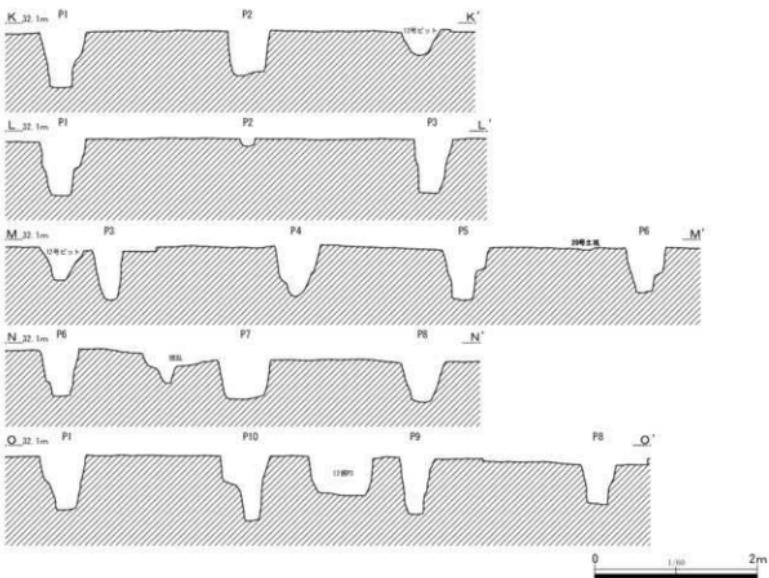
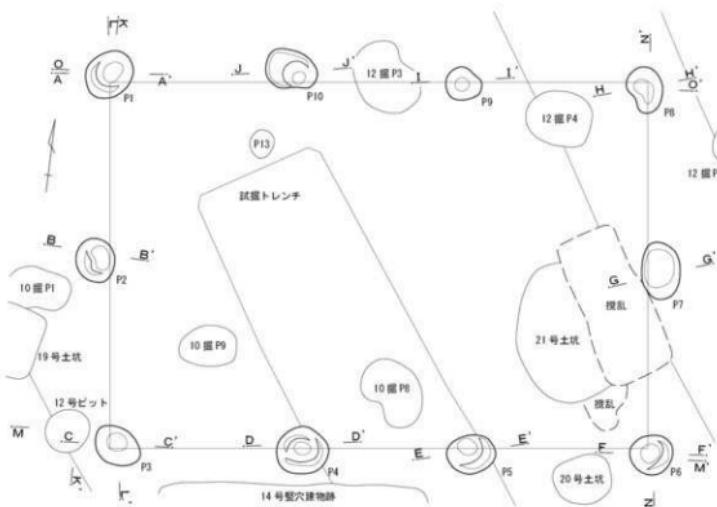
第35図 13・14号掘立柱建物跡(2)



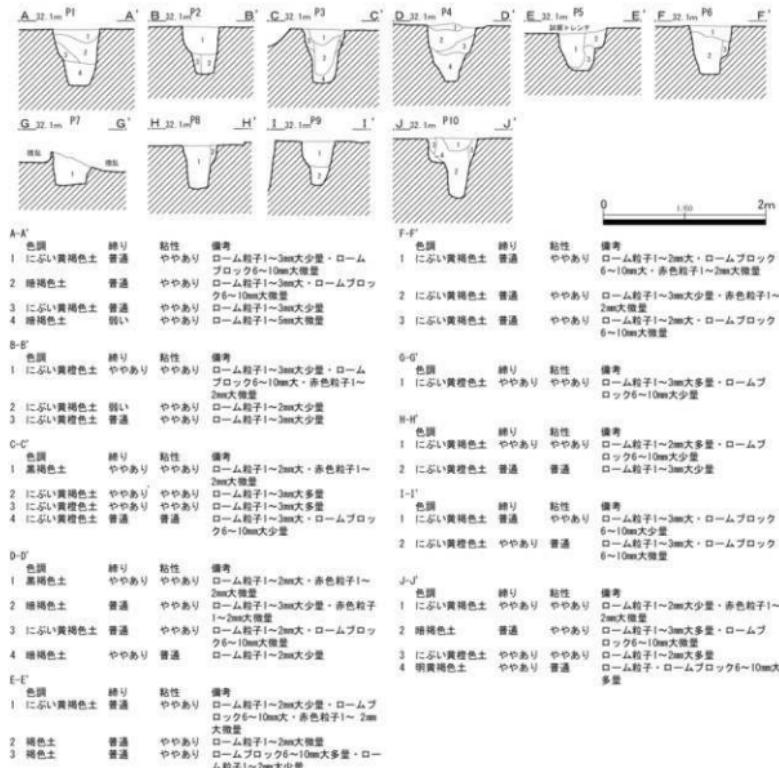
第36図 13号掘立柱建物跡出土遺物

第10表 13号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
I	須恵器 壺	底径:(6.0) 器高:[1.5]	針・長・ チ・石	内面:灰 外面:灰	還元 焰	右回転コロ形成。 内面:回転ナデ。 外面:回転ナデ。底部回転条切り離し。	底部片	P6 覆土	南北企座。 底面に墨書き 「今」。



第37図 15号掘立柱建物跡(1)



第38図 15号掘立柱建物跡(2)

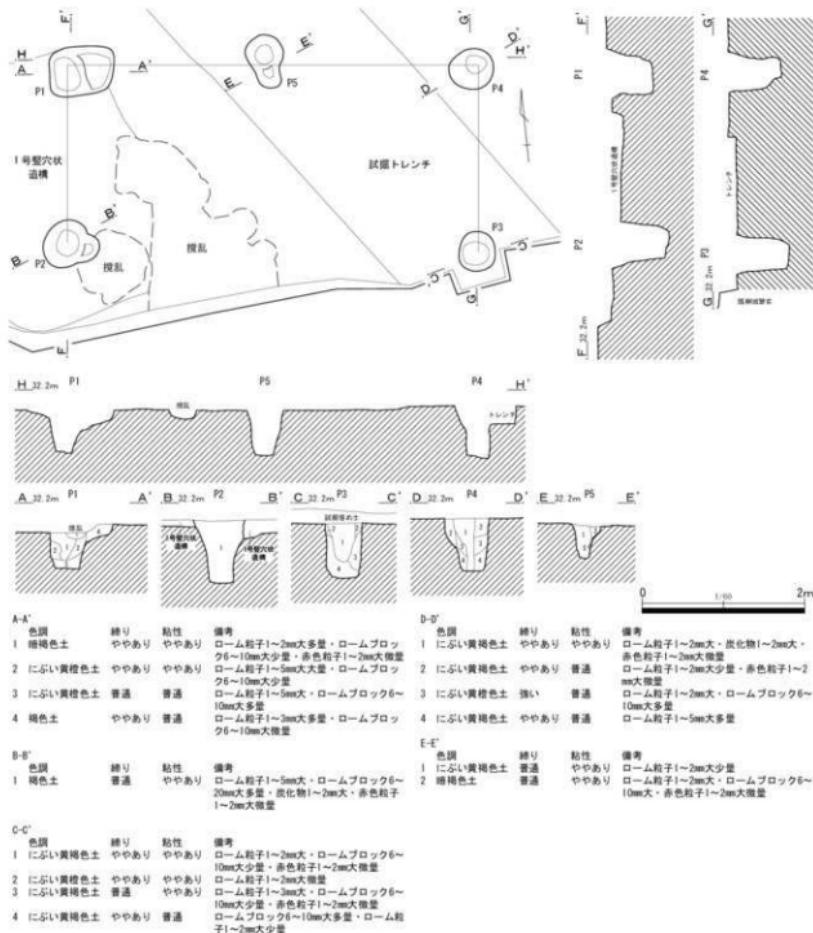
3間×2間の建物で、南辺が短い台形状を呈する。桁行は3間で芯々距離間(P 3-P 6)4.61m、芯々距離間(P 1-P 8)5.43m、梁間は2間で芯々距離間(P 1-P 3)4.38m、芯々距離間(P 6-P 8)4.33mを測る。柱間は桁側芯々距離間1.47～2.00m、梁側芯々距離間1.97～2.36mを測る。主軸はN-22°-Eである。

柱穴の平面形状は不整梢円形を呈し、断面形状はU字形・逆台形である。柱穴の規模はP 1長軸0.68m、短軸0.60m、深さ0.63m、P 2長軸0.49m、短軸0.44m、深さ0.55m、P 3長軸0.82m、短軸0.56m、深さ0.48m、P 4長軸0.56m、短軸0.54m、深さ0.64m、P 5長

軸0.64m、短軸0.49m、深さ0.53m、P 6長軸0.74m、短軸0.53m、深さ0.59m、P 7長軸0.52m、短軸0.41m、深さ0.46m、P 8長軸0.51m、短軸0.28m、深さ0.61m、P 9長軸0.40m、短軸0.39m、深さ0.54m、P 10長軸0.47m、短軸0.42m、深さ0.60mを測る。

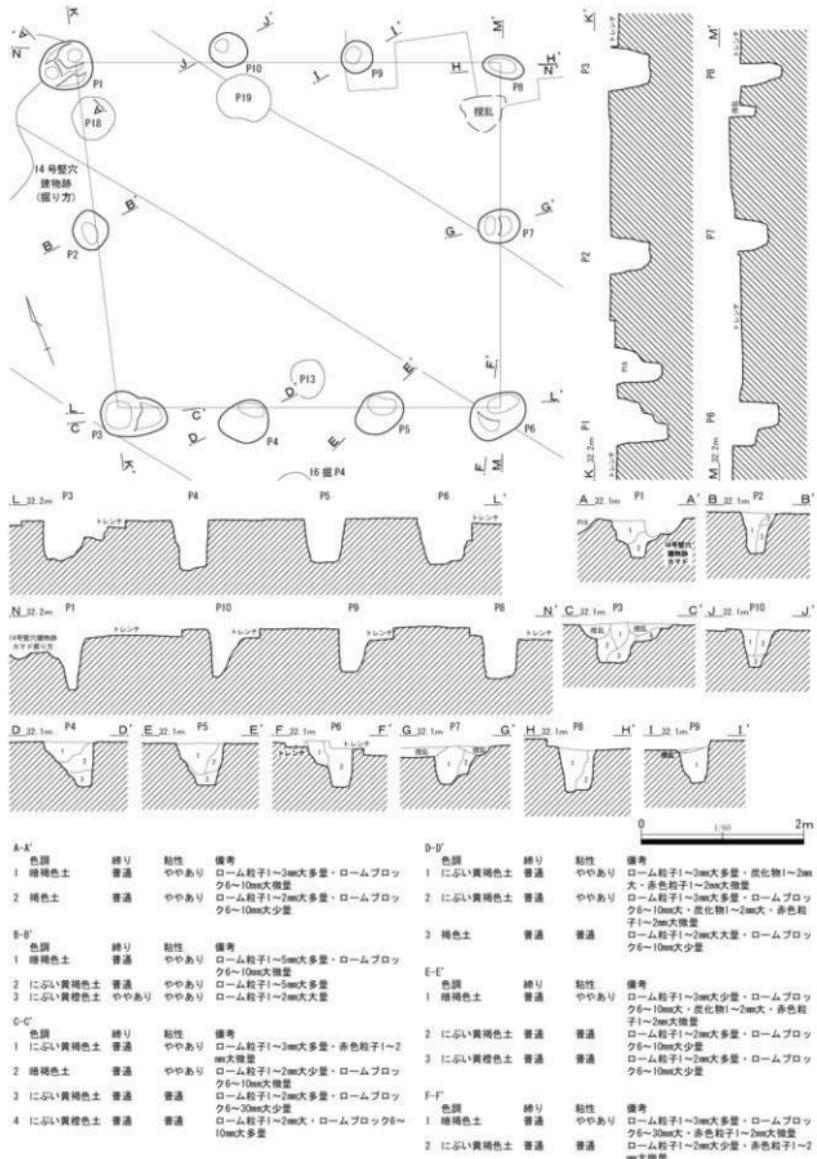
覆土はローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土を主体として、にぶい黄褐色土・暗褐色土・褐色土からなる。柱痕は認められない。

遺物は土師器・須恵器片がP 2・3・9・10から僅かに出土している。P 10出土の土師器壺(第42図1)を掲載した。覆土中からの出土である。



第39図 16号掘立柱建物跡

時期は出土遺物から古代と推定される。



第40図 17号掘立柱建物跡（1）

0-6'		I-I'		J-J'			
色調	純り	粘性	備考	色調	純り	粘性	備考
1 にぶい黄褐色土 普通	ややあり	ローム粒子1~5mm多量・炭化物1~2mm 大微量	1 にぶい黄褐色土 普通	ややあり	ローム粒子1~2mm多量・赤色粒子1~2mm多量		
2 にぶい黄褐色土 普通	普通	ローム粒子1~2mm多量					
H-H'		K-K'		L-L'			
色調	純り	粘性	備考	色調	純り	粘性	備考
1 にぶい黄褐色土 普通	ややあり	ローム粒子1~5mm少量・ロームブロック 2mm~10mm少量・炭化物1~2mm大・赤色粒 子1~2mm微量	1 にぶい黄褐色土 普通	ややあり	ロームブロック6~10mm少量・ローム 粒子1~5mm大微量		
2 にぶい黄褐色土 普通	普通	ローム粒子1~5mm多量・ロームブロック 2mm~20mm少量・炭化物1~2mm大・赤 色粒子1~2mm微量	3 墓褐色土 普通	ややあり	ローム粒子1~3mm多量		

第 41 図 17 号掘立柱建物跡 (2)



第 42 図 17 号掘立柱建物跡出土遺物

第 11 表 17 号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	土師器 壺	口径:(14.0) 器高:(2.4)	長・チ 石・凝	内面: 橙 外面: 橙	良好	内面: 口縁部~体部横方向のナデ 外面: 口縁部横方向のナデ後、体部 横方向のケズリ。	口縁~ 体部片	P10 覆土	

## 5 土坑

### 19号土坑（第 43 図 図版 6）

A 区中央西寄りに位置する。10 号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が新しい。

平面形状は隅丸長方形で、断面形状は逆凸字形を呈し中央が長方形状に窪む。規模は長軸 0.97 m、短軸 0.89 m、深さ 0.25 m である。長軸は N - 12° - E である。

覆土は 2 層に分層される。ローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土からなる。

遺物は土師器甕片が少量出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期は重複関係から古代以降と想定される。

### 20号土坑（第 43 図 図版 6）

A 区中央に位置する。

平面形状は不整椭円形で、断面形状は逆台形を呈する。規模は長軸 0.71 m、短軸 0.63 m、深さ 0.26 m である。長軸は N - 42° - E である。

覆土は 2 層に分層される。ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土と明黄褐色土からなる。

遺物は土師器甕・須恵器环片が微量出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期は不明である。

### 21号土坑（第 43 図 図版 6）

A 区中央に位置する。15 号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。北東側を耕作痕によって削平されている。

平面形状は不整椭円形で、断面形状は逆台形を呈する。規模は長軸 (1.75) m、短軸 (1.15) m、深さ 0.39 m である。長軸は N - 10° - W である。

覆土は 2 層に分層される。ローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土と暗褐色土からなる。

遺物は土師器甕・須恵器環片が少量出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期は不明である。

### 22号土坑（第 43 図 図版 6）

A 区北東側に位置する。15 号竪穴建物跡・12 号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が最も新しい。

平面形状は不整椭円形で、断面形状は逆台形を呈する。規模は長軸 1.12 m、短軸 0.88 m、深さ 0.76 m である。長軸は N - 54° - E である。

覆土は 8 層に分層される。ローム粒子・ロームブロックを含むにぶい黄褐色土・暗褐色土からなる。

遺物は土師器甕片が微量出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期は不明である。

### 23号土坑（第43図 図版6）

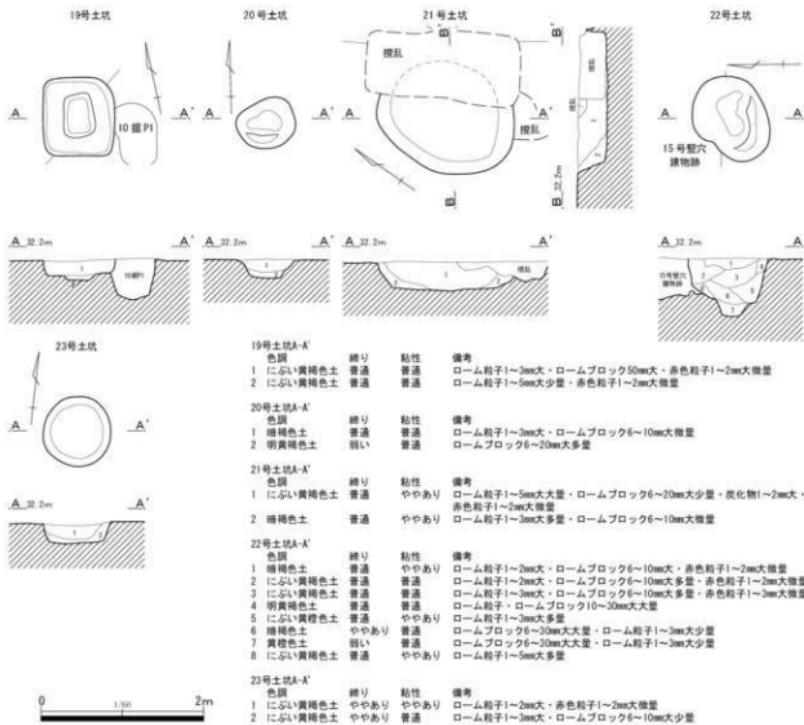
A区南東側に位置する。

平面形状は楕円形で、断面形状は逆台形を呈する。規模は長軸0.86m、短軸0.84m、深さ0.30

mである。長軸はN - 42° - Eである。

覆土は2層に分層される。ローム粒子・ロームブロック・赤色粒子を含むにぶい黄褐色土を主体とする。

遺物はなく、時期は不明である。



第43図 19・20・21・22・23号土坑

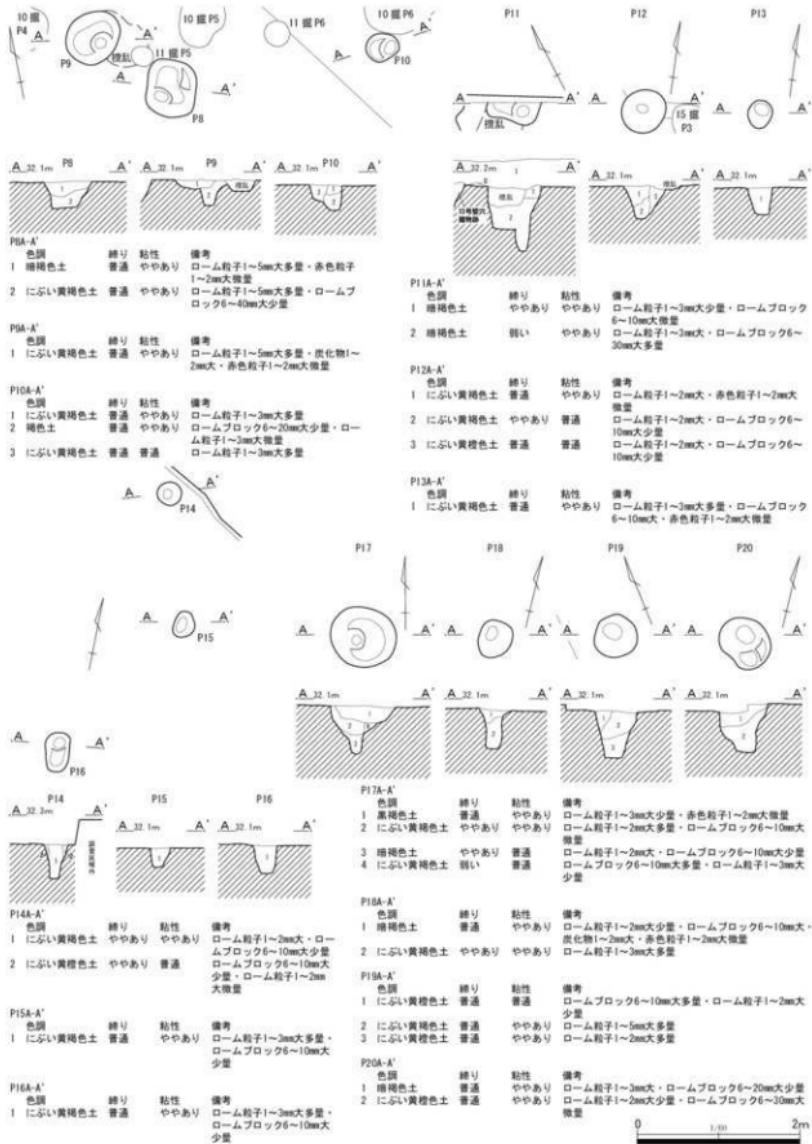
## 6 ピット (第44図)

本調査区では13基のピットを検出した。すべてA区に所在する。

8・9号ピットは11号掘立柱建物跡P3・4に、10号ピットは10号掘立柱建物跡P7に、12・13号ピットは15号掘立柱建物跡P3・10に、

18・19・20号ピットは17号掘立柱建物跡P1・4・5・10に、11号ピットは13号竪穴建物跡カマド東側にそれぞれ近接する。14・15・16号ピットは13号竪穴建物跡西側、17号ピットはA区南東側に位置する。

ピットの平面形状は不整楕円形・楕円形・隅丸長方形を呈し、断面形状は逆台形・逆凸字形・V



第44図 8~20号ビット

字形を呈する。規模は長軸 0.30 ~ 0.83 m、短軸 0.26 ~ 0.61 m、深さ 0.25 ~ 0.80 m を測る。

覆土はそれぞれ 1 ~ 4 層に分層される。ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土と/or 黄褐色土からなる。

遺物は P 8・9・10・20 から須恵器環片・土師器壺片が少量ながら出土しているが、小片のた

め図示できなかった。

これらのピットはいずれも配列に明確な規則性は認められず、性格・用途は不明である。

第 12 表 ピット計測表

ピット番号	位置	平面形状	断面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	覆土	備考
P8	A 区 南西側	不整橢円形	逆台形	0.72	0.61	0.39	1 層	須恵器環片・土師器壺片 7 点出土。
P9	A 区 南西側	圓丸長方形	逆凸字形	0.71	0.61	0.31	2 層	須恵器環片・土師器壺片 9 点出土。
P10	A 区 南西側	橢円形	逆台形	0.41	0.35	0.34	3 層	須恵器環片・土師器壺片 2 点出土。
P11	A 区 東端	圓丸長方形	逆凸字形	(0.62)	(0.35)	0.80	2 层	出土遺物なし。
P12	A 区 中央 西寄り	不整橢円形	逆台形	0.56	0.52	0.42	3 層	出土遺物なし。
P13	A 区 中央 南側	不整橢円形	逆台形	0.35	0.29	0.39	1 層	出土遺物なし。
P14	A 区 東側	橢円形	逆台形	0.30	0.29	0.43	2 層	出土遺物なし。
P15	A 区 東側	不整橢円形	逆台形	0.33	0.26	0.25	1 層	出土遺物なし。
P16	A 区 東側	不整橢円形	逆台形	0.49	0.30	0.46	1 層	出土遺物なし。
P17	A 区 中央 南東側	橢円形	逆凸字形	0.83	0.74	0.59	4 層	出土遺物なし。
P18	A 区 中央 南寄り	不整橢円形	V 字形	0.57	0.41	0.50	2 層	出土遺物なし。
P19	A 区 中央 南寄り	不整橢円形	逆台形	0.54	0.53	0.60	3 層	出土遺物なし。
P20	A 区 中央 南寄り	不整橢円形	逆台形	0.67	0.58	0.59	2 層	須恵器環片・土師器壺片 3 点出土。

## 7 溝状遺構

### 1 号溝状遺構（第 45 図 図版 6）

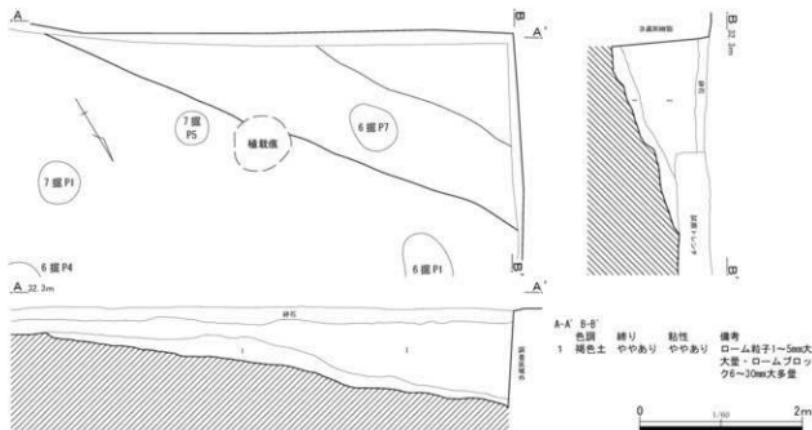
C 区西端部に位置する。南東・北西側は調査区域外に延びる。6・7 号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が最も新しい。

規模は、検出長 6.36 m、検出幅最大 2.17 m、深さ 0.88 m を測る。壁面は緩やかに立ち上がるが、底面が検出されていないため断面形状は不明である。N - 36° - W を軸に北西から南東方向

へほぼ直線的に走行する。

覆土は 2 層で、大半が I 層で埋め戻されている。I 層はローム粒子・ロームブロックを含む褐色土である。

遺物の出土はなく、構築された正確な時期は不明である。ただ、大半が I 層によって埋没していることから、少なくとも近世以降の農地開発による地境や根切り溝として利用されていたと想定される。



第45図 1号溝状遺構

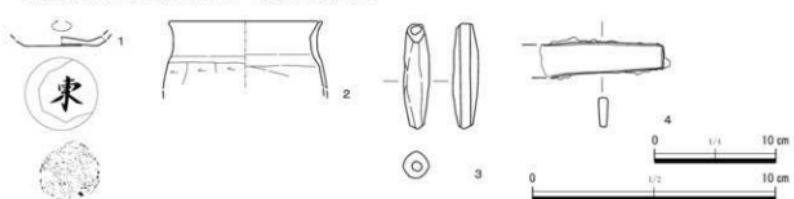
## 8 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物から須恵器壺1点(第46図1)、土師器甕1点(第46図2)、土製品土錐1点(第46図3)、鉄製刀子(第46図4)を掲載する。

1は墨書き器で、外面底部に「東」と書かれて

いる。2は外面にススが付着している。4の刀子は茎部のみの出土である。

そのほか非掲載遺物として、土師器甕・台付甕片、須恵器壺・塊・甕片、石錐、陶磁器片、不明鉄製品が538点出土している。



第46図 遺構外出土遺物

第13表 遺構外出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	須恵器壺	底径: (6.0) 器高: [0.8]	長・石・針・チ	内面: にぶい赤褐色 外面: 明赤褐色	酸化焰	右回転クロコ形。 内面: 回転ナデ。 外面: 回転ナデ。底部削除後、手で削り離す。	底部片	搅乱内	南北合流。 底面に墨書き「東」。
2	土師器甕	口径: (12.6) 器高: [5.5]	長・チ・石・凝	内面: にぶい赤褐色 外面: 赤褐色	良好	内面: 口縁部横方向のナデ。胴部横方向のナデ。 外面: 口縁部横方向のナデ。胴部横方向のケズリ。	口縁～ 胴部 30%	搅乱内	外面にスス付着。
3	土製品土錐	長: 4.3 幅: 1.1 厚さ: 1.1 孔径: 0.4 重さ: 4.256	チ・長・凝・石	明赤褐色	良好	凝方向のナデ。	ほぼ 完形	搅乱内	
4	鉄製品刀子	長: [5.1] 幅: [1.4] 厚さ: 0.4 重さ: 8.984					茎部片	搅乱内	

## IV 総括

今回の調査では、竪穴建物跡6軒、竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡10棟、土坑5基、ピット13基、溝状遺構1条が検出された。各遺構についてはⅢにおいて概要を示しているので、ここでは掘立柱建物跡と墨書きについて触れ、総括としたい。

### 1 山田遺跡19区の掘立柱建物跡

19区で検出された掘立柱建物跡は10棟である。桁行3間×梁間2間を基本とし、桁行の方向はおおよそ東西、南北に二分される。本区では南北方向に桁行を持つ掘立柱建物跡を主体とする。柱穴の平面形状は不整梢円形であるが、四隅の柱穴についてはL字状に掘り込んでいるものがある。また、覆土に柱痕が残る柱穴では、柱を支えるために柱周囲の埋め土を突き固めて基礎を強固にしている様子が窺え、上屋建物の荷重に十分耐えるよう考慮した当時の工法が垣間見える。

本調査検区では掘立柱建物跡が互いに重複し合いながら、おむね南北方向に縦列して配置されているのを特徴とする。隣接する16区（未刊）においても、5間×2間の大型の掘立柱建物跡を含む建物が重複しながら、南北方向に列をなして配置されている（註1）。C区で検出した6・7号掘立柱建物跡は16区で確認されており、今回の調査で検出された6号掘立柱建物跡P6・7、7号掘立柱建物跡P5はその延長部分にある。

掘立柱建物跡同士の重複関係が明確にわかるのは13・14号掘立柱建物跡のみである。柱穴同士が切り合っており、南側に位置する13号掘立柱建物跡のほうが新しい。ただし、14号掘立柱建物跡の桁行方向が不明であるため、同方向あるいは異方向の掘立柱建物跡同士の新旧関係については、今回の調査では把握できていない。

山田遺跡全体で確認されている古代の竪穴建物跡は起伏の少ない平坦な地形に占地していることもあり重複が少なく、空白地帯を設けながら井戸を有する数軒あるいは十数軒のまとまりを形成

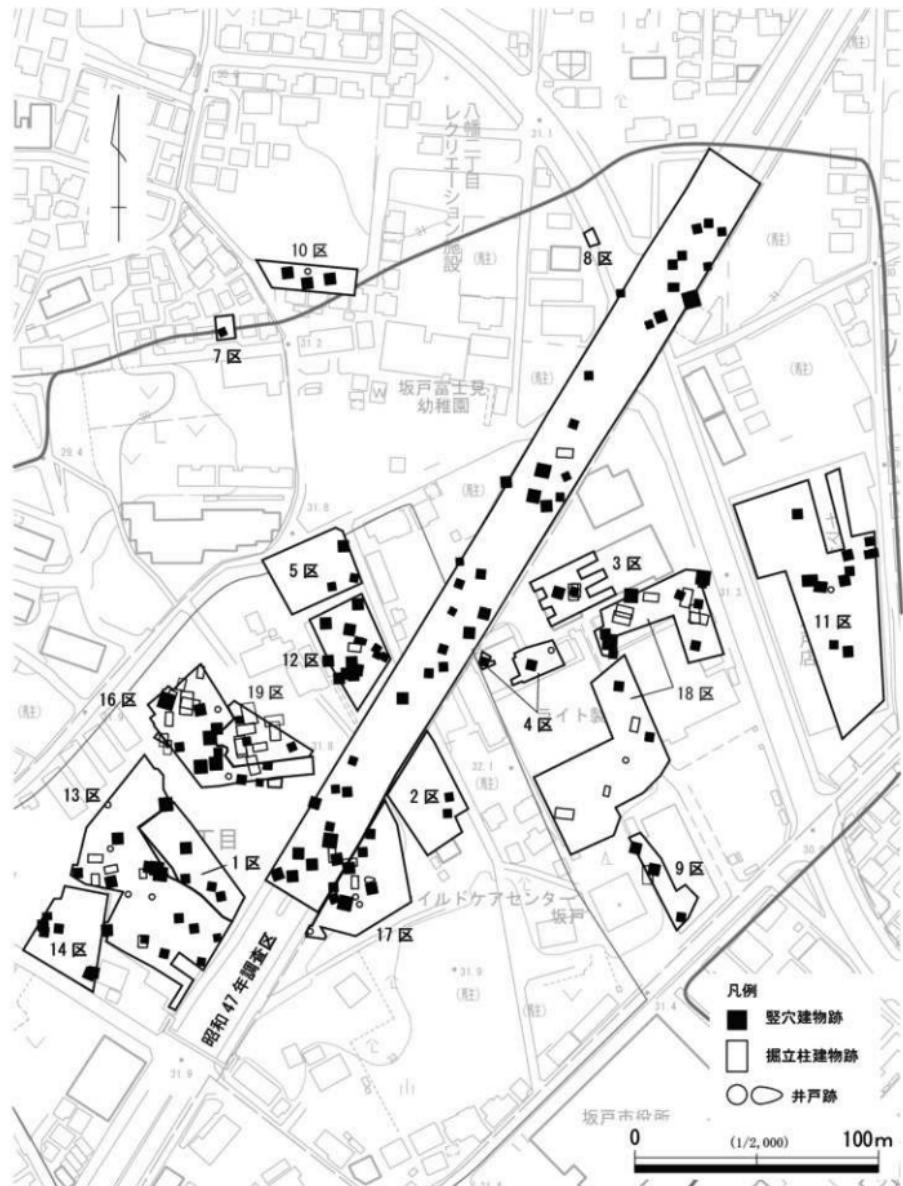
して遺跡全体に万遍なく広がっている。対照的に、掘立柱建物跡は少なくとも3棟以上を一単位とするグループを形成しながら、狭い範囲に分布している（第47図）（註2）。掘立柱建物跡は竪穴建物跡との重複は少ないが、掘立柱建物跡同士の重複が激しいため、同じ場所で何度も建て替えられた様子が窺える。このことから、掘立柱建物跡は地勢に関わらず、決められた範囲で計画的に建て替えを行った結果、例えば、16・19区や昭和47年調査区と17区にわたってみられるような、縦列配置という規則性が顕在化したものと想定される。特に台地縁辺に位置する16・19区にわたる掘立柱建物跡の縦列配置とその密度においては、山田遺跡内では特異であるといえる。

掘立柱建物跡の構築時期については、山田遺跡が乗る坂戸台地では古代の集落が8世紀前半から始まることや10・12号掘立柱建物跡が8世紀後半から9世紀後半の竪穴建物跡に切られていること、17号掘立柱建物跡の柱穴から出土した、口縁部が外反し、体部が浅い器形を有する土師器环（第42図1）の特徴が7世紀末から8世紀前半にみられることから、少なくとも8世紀前半から9世紀前半の時期が与えられそうである。

飯盛川に向かって傾斜する台地の縁辺に位置する19区では、台地へ人々が進出して以降、まず始めに掘立柱建物跡が配置され、頻繁に建て替えが行われたのち、集落域の拡大とともに広がる竪穴建物跡が、掘立柱建物跡に代わって占有していくものと想定される。

### 2 山田遺跡19区の墨書き土器

今回の調査では遺構内外から墨書き土器が出土している。想定される墨書きは「令」「東」「十（大）」である。13号竪穴建物跡出土の墨書き（第17図1）は欠損していたが、他の遺構出土の墨書きと照らし合わせ、「令」と判断した。14号竪穴建物跡出土須恵器环（第21図1）にも外面体部に墨書きがな



第47図 山田遺跡遺構配置図

されているが、判読不明である。墨書は土器の外側の体部と底部のみにみられ、外面底部に書かれている墨書は、すべて回転糸切無調整のものに限られる。

「令」と想定される墨書は、隣接する 16 区 1・2・4・5・6・9 号竪穴建物跡と 2 号井戸でも出土している。山田遺跡における他区の報告を待ちたいが、坂戸市内の遺跡では、この墨書の出土例はこれまでの報告には見受けられない。県内では上里町中堀遺跡第 6 号竪穴建物跡出土の石製紡錘車（註 3）や深谷市如意南遺跡第 24 号竪穴建物跡出土須恵器環でみられる。また、関東地方では千葉県印西市武ト込遺跡 SI009 土師器環例、茨城県つくば市中原遺跡 212 号住居跡出土高台付环例、栃木県野木町清六三遺跡 SI-91 出土灰釉陶器皿例、栃木県益子町新屋敷西遺跡 4 号住居跡出土例がある（註 4）。これらは 8 世紀後葉から 10 世紀前半に比定される土器・石製品に書かれている。「令」の出土例は少なく、その意味するところも不明であるが、時期・地域が限定されたものではなく、長い期間にわたって様々な場所で用いられた墨書・刻書であったといえる。坂戸市内に限っていえば、「又」銘墨書須恵器が大量に出土している一天狗遺跡やほぼ同時期で同規模の集落遺跡である若葉台遺跡などから同様の墨書は検出されていないことを考慮すると、「令」は本遺跡を特徴づける墨書土器であると判断してよいであろう。

なお、山田遺跡では上記の墨書のほかに「上」・「入」・「片牧」・「十二」が出土している。特に、昭和 47 年調査 27 号住居跡より出土した「片牧」という墨書から、本遺跡を含めた入間地域内に馬匹・生産管理を行っていた施設が推定されている。同様の墨書は本調査区では出土していないため、今回の調査では馬匹・生産管理を連想させる調査成果を得ることはできなかった事を付け加えておく。

註 1 山田遺跡では調査区によっては正式な報告書が未刊であるため、今後内容について変更される可能性がある。

註 2 第 47 図は山本が作成し、宮田が加筆・修正した。6 区

から 18 区までは未報告であるが、本書第 4・47 図掲載にあたり、これまでの調査成果をまとめていたいて作図していただくなど山本氏には多大な尽力を賜った。

註 3 紡錘車側縁に「令」と想定されている文字とともに「荒」「馬」が刻書されている。

註 4 埼玉県深谷市如意遺跡出土例は 8 世紀末葉～9 世紀前半、千葉県印西市武ト込遺跡 SI009 出土例は 8 世紀後葉、つくば市中原遺跡 212 号住居跡出土例は 10 世紀前半、栃木県野木町清六三遺跡 SI-91 出土例は 10 世紀前半、栃木県益子町新屋敷西遺跡 4 号住居跡出土例は 10 世紀前半と推定されている。

#### 【引用・参考文献】

- 上原康子・篠原祐一 1999 「清六三遺跡Ⅳ」<sup>16</sup> 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 加藤恭朗 1990 「坂戸市遺跡群 2：坂戸市遺跡群発掘調査報告書第 II 集」<sup>17</sup> 坂戸市教育委員会
- 香取正彦・糸川道行・井上哲郎・大内千鶴 2008 「千葉県教育振興財団調査報告第 591 集 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書—印西市南西ヶ作遺跡・木幡村武ト込遺跡」<sup>18</sup>
- 栗岡潤 2000 「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 241 集 如意／如意南」<sup>19</sup>埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 酒井清治 1993 「武藏国内の東山道について・特に古代遺跡との関連から」<sup>20</sup>『国立歴史民俗博物館研究報告 第 50 集』 国立歴史民俗博物館
- 坂口一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器編年」<sup>21</sup>『群馬県史研究』24 号 群馬県史編さん委員会
- 坂戸市教育委員会 1983 「坂戸市史」<sup>22</sup> 原始史料編
- 坂戸市教育委員会 1992 「坂戸市史」<sup>23</sup> 古代史料編
- 田中広明・末木啓介 1997 「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 190 集 中堀遺跡」<sup>24</sup> 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井莊 1973 「埼玉県遺跡調査会報告第 18 集 山田遺跡・相模原遺跡発掘調査報告」<sup>25</sup> 埼玉県遺跡調査会
- 成島一也・宮田和男 2000 「茨城県教育財団文化財調査報告第 159 集 中原遺跡 2」<sup>26</sup> 財団法人茨城県教育財団
- 益子町 1991 「新屋敷西遺跡」<sup>27</sup>
- 三原耕吾 2012 「池ノ台遺跡 1」<sup>28</sup> 坂戸市教育委員会
- 山本良太・後藤亮太 2021 「下山田遺跡 4 区」<sup>29</sup> 坂戸市教育委員会

写 真 図 版



1 調査区遠景



2 調査区全景



1 4号竪穴建物跡



2 4号竪穴建物跡 炭化材検出状況



3 4号竪穴建物跡 炭化材出土状況



4 4号竪穴建物跡 掘り方



5 5号竪穴建物跡



6 5号竪穴建物跡 掘り方



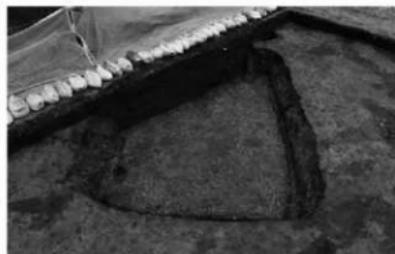
7 7号竪穴建物跡



8 7号竪穴建物跡 掘り方

山田遺跡 19 区

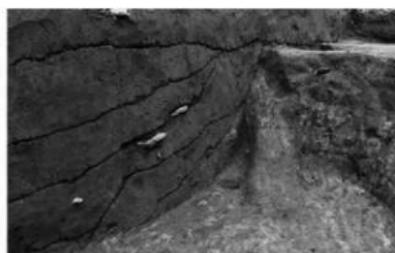
図版 3



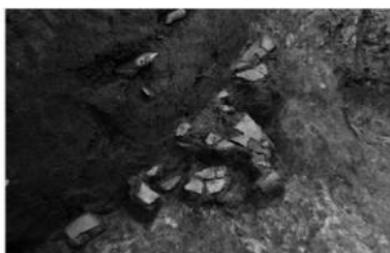
1 13号竪穴建物跡



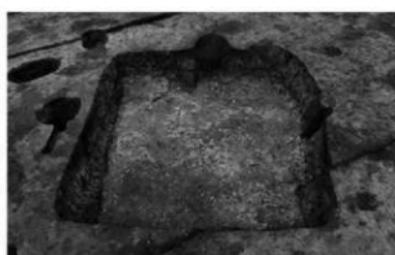
2 13号竪穴建物跡 掘り方



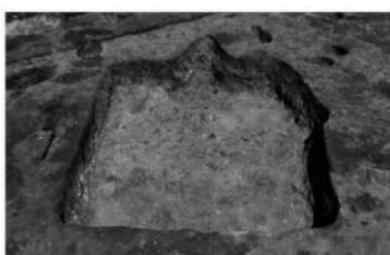
3 13号竪穴建物跡カマド



4 13号竪穴建物跡カマド 遺物出土状況



5 14号竪穴建物跡



6 14号竪穴建物跡 掘り方



7 14号竪穴建物跡カマド



8 14号竪穴建物跡カマド 遺物出土状況

図版 4

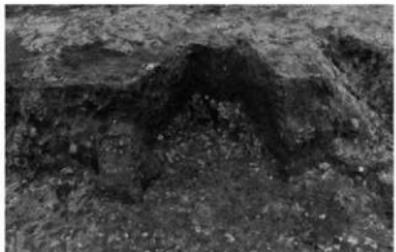


1 15号竪穴建物跡

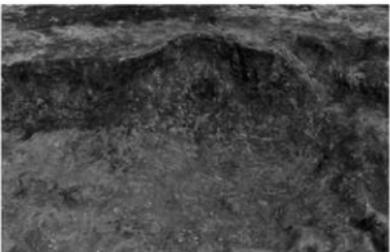
山田遺跡 19区



2 15号竪穴建物跡 挖り方



3 15号竪穴建物跡カマド



4 15号竪穴建物跡カマド 挖り方



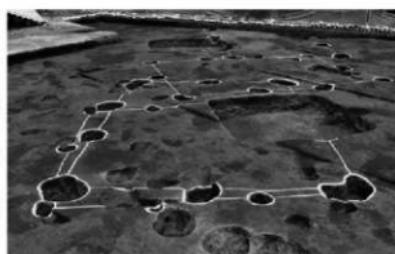
5 10～15号掘立柱建物跡配置状況



1 6号掘立柱建物跡



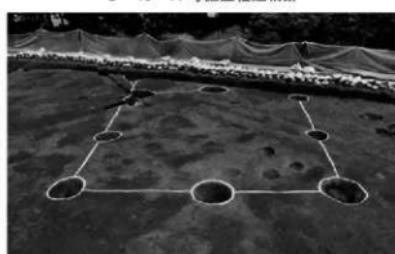
2 7号掘立柱建物跡



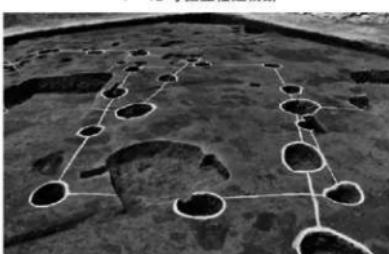
3 10・11号掘立柱建物跡



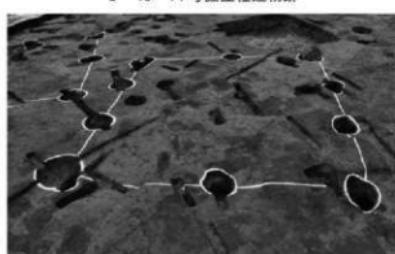
4 12号掘立柱建物跡



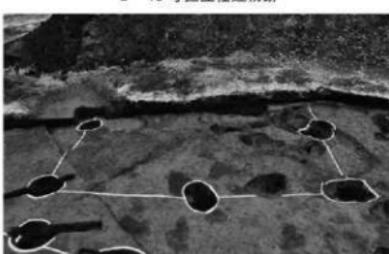
5 13・14号掘立柱建物跡



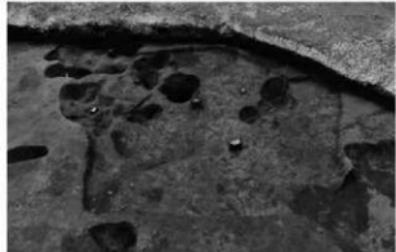
6 15号掘立柱建物跡



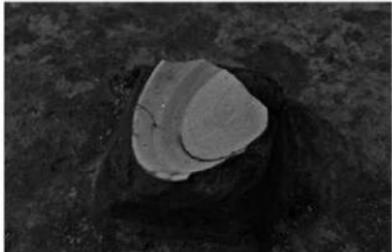
7 16号掘立柱建物跡



8 17号掘立柱建物跡



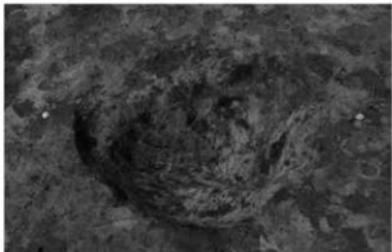
1 1号竪穴状遺構



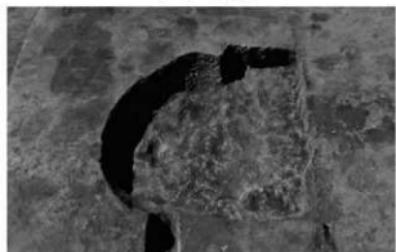
2 1号竪穴状遺構 遺物出土状況



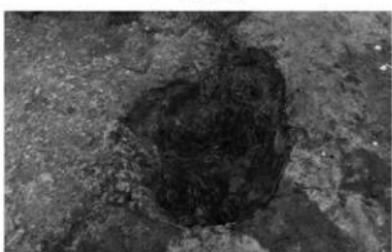
3 19号土坑



4 20号土坑



5 21号土坑



6 22号土坑



7 23号土坑



8 1号溝状遺構



1 4号竪穴建物跡 第10図1



2 4号竪穴建物跡 第10図2



3 4号竪穴建物跡 第10図3



4 4号竪穴建物跡 第10図4



5 4号竪穴建物跡 第10図5



6 4号竪穴建物跡 第10図6



7 4号竪穴建物跡 第10図7



8 4号竪穴建物跡 第10図8

図版 8



1 4号竪穴建物跡 第10図9

山田遺跡 19区



2 4号竪穴建物跡 第10図10



3 5号竪穴建物跡 第12図1



4 5号竪穴建物跡 第12図2



5 7号竪穴建物跡 第14図1



6 13号竪穴建物跡 第17図1



7 13号竪穴建物跡 第17図1 墨書き



8 13号竪穴建物跡 第17図2



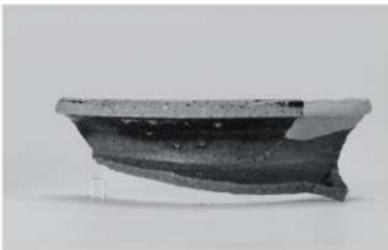
1 13号竪穴建物跡 第17図3



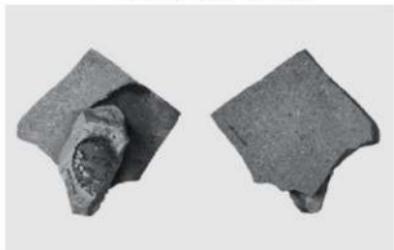
2 13号竪穴建物跡 第17図4



3 13号竪穴建物跡 第17図5



4 13号竪穴建物跡 第18図6



5 13号竪穴建物跡 第18図7



6 13号竪穴建物跡 第18図8



7 13号竪穴建物跡 第18図9



8 13号竪穴建物跡 第18図10

図版 10



1 13号竪穴建物跡 第18図11

山田遺跡 19区



2 13号竪穴建物跡 第18図12



3 14号竪穴建物跡 第21図1



4 14号竪穴建物跡 第21図2



5 14号竪穴建物跡 第21図3



6 14号竪穴建物跡 第21図4



7 14号竪穴建物跡 第21図5



8 14号竪穴建物跡 第21図6



1 14号竪穴建物跡 第21図7



2 14号竪穴建物跡 第21図8



3 14号竪穴建物跡 第21図9



4 14号竪穴建物跡 第21図10



5 14号竪穴建物跡 第21図10 内面



6 14号竪穴建物跡 第21図11

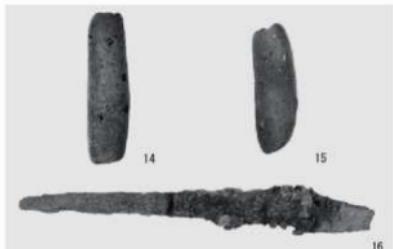


7 14号竪穴建物跡 第21図12



8 14号竪穴建物跡 第21図13

図版 12



1 14号竪穴建物跡 第21図14~16

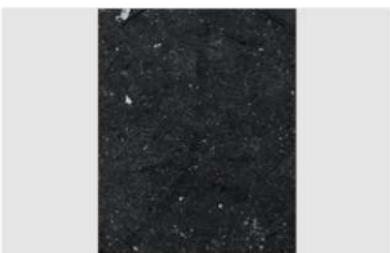
山田遺跡 19区



2 15号竪穴建物跡 第24図1



3 1号竪穴状造構 第26図1



4 1号竪穴状造構 第26図1 墨書



5 1号竪穴状造構 第26図2



6 10号据立柱建物跡 第30図1



7 10号据立柱建物跡 第30図2



8 10号据立柱建物跡 第30図3



1 13号掘立柱建物跡 第36図1



2 13号掘立柱建物跡 第36図1 墨書き



3 17号掘立柱建物跡 第42図1



4 造構外出土遺物 第46図1



5 造構外出土遺物 第46図1 墨書き



6 造構外出土遺物 第46図2



7 造構外出土遺物 第46図3



8 造構外出土遺物 第46図4

## 報 告 書 抄 錄

## 山田遺跡 19 区

2021 年 9 月 30 日 発行

発行者 埼玉県坂戸市教育委員会  
埼玉県坂戸市千代田一丁目 1 番 1 号

印 刷 朝日印刷工業株式会社  
群馬県前橋市元総社町 67 番地

